

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書VII

わに ぐち した 遺跡
鰐 口 下 遺跡
み やま 遺跡
美 山 遺跡

1989

新潟県教育委員会

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書Ⅶ

わに ぐち した 遺跡
鰐口下遺跡
み 美 やま 遺跡
美山遺跡

1989

新潟県教育委員会

序

昭和63年7月20日、北陸自動車道が全線開通した。本県を起点として、富山県・石川県・福井県経由で滋賀県に至る、日本海側で初めての縦貫型高速道路である。

この一大事業の施行命令が出された昭和47年以来、新潟県教育委員会は事業主体である日本道路公団と協議を重ね、路線内に存在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してきた。これらの調査によって数々の貴重な資料を得ることができその成果は本県の歴史に新しい知見を加えているものと自負している。多くの方々の協力を得て、長年にわたり継続してきた本事業に係る発掘調査も、昭和61年度実施の糸魚川地区の調査を最後としてその全てを終了した。

本書は、糸魚川地区鰐口下遺跡・美山遺跡の発掘調査報告書である。糸魚川地区の路線内に存在する遺跡としては最も西に位置し、工事工程との関係から調査の実施時期は最終年度となった。両遺跡は、姫川の河口流域に開けた低地を眼下に眺め、日本海や青海町の山々を一望できる場所にあり、古代この地域で中心的役割を担っていたと目される集落跡にも近い。今回の調査により鰐口下遺跡からは墨書き土器や完形の灰釉陶器が出土しているが、これらの遺物は遺跡の地理的環境とともにその性格を考える上で興味深い。本調査において明らかとなった成果が、当地域の歴史解明の一助となれば幸いである。

最後に、本調査に際し多大な御協力を賜った糸魚川市教育委員会並びに市民の方々、また計画から調査実施に至るまで格別の御協力を賜った日本道路公団新潟建設局、同糸魚川工事事務所の各位に対し、ここにあらためて衷心より謝意を表する次第である。

平成元年3月

新潟県教育委員会

教育長 田 中 邦 正

例　　言

1. 本書は新潟県糸魚川市大字上刈字鰐口下・字美山に所在する鰐口下遺跡・美山遺跡の調査報告書である。北陸自動車道建設に伴い、新潟県が日本道路公団から受託して実施したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、新潟県教育委員会が調査主体となり、昭和58年の分布調査、昭和59年・60年の確認調査を経て昭和61年4月1日から同年7月26日の期間に実施した。
3. 遺物の整理、復元作業、報告書作成は新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係職員および整理作業員がこれにあたった。
4. 発掘調査の出土遺物は、一括して新潟県教育委員会が保存、管理している。なお、出土遺物の注記号は鰐口下遺跡を「ワニ」、美山遺跡を「美」とした。
5. 本書の執筆作業は、寺崎裕助が第Ⅰ章、高橋昌也が第Ⅱ章、第Ⅳ章2(遺構)、第Ⅵ章2(遺構)、國島聰が第Ⅳ章3(縄文土器・弥生土器)、第Ⅴ章2(縄文土器)、第Ⅶ章(縄文土器)、その他は、鈴木俊成がそれぞれ分担した。なお、本書の編集は、鈴木・高橋が行なった。
6. 訳はそれぞれの頁の下欄に記した。また、引用文献は本文末に記した。
7. 実測図の番号は挿図・写真図版とも共通の通し番号としたが、第Ⅶ章はその限りでない。
8. 本書の示す方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。作成した図版のうち既成の地図を使用したものは、それぞれの図に出典を記した。その他は日本道路公団が測量した地形図を用いた。
9. 図版の空中写真是、(財)日本地図センター発行の1947年撮影のものを使用した。
10. 発掘調査から本書の作成にいたるまで、下記の方々から貴重な御教示をいただいた。厚く御礼申し上げる。(敬称略 50音順)
青木重孝・石川日出志・木島 勉・木立雅朗・小林達雄・田中耕作・土田孝雄・山本正敏

目 次

第Ⅰ章 序 説

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1

第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の環境

1. 位置と地形	2
2. 周辺の環境	2

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の方法	5
A 鰐口下遺跡	5
B 美山遺跡	6
2. 整 理	6

第Ⅳ章 鰐口下遺跡

1. 層 序	7
2. 遺 構	8
3. 遺 物	13

第Ⅴ章 美山遺跡

1. 層 序	19
2. 包含層出土の遺物	19

第Ⅶ章 ま と め

1. 繩文時代後期初頭～前葉の土器群について	22
2. 平安時代の遺構・遺物について	26
3. 結 語	27

引用文献	27
------------	----

図 版

図 面

- 1 (鶴口下遺跡) 造構配置図
- 2 () 1~4・6号溝状造構土層断面
- 3 () その他の造構
- 4 () 4号土坑、8・9号溝状造構
- 5 () 1号住居跡
- 6 () 2号住居跡
- 7 () 繩文時代の土器・石器(造構外出土)
- 8 () 繩文時代の石器(造構外出土)
- 9 () 繩文時代の石器(造構外出土)
- 10 () 繩文時代の石器(造構外出土)
- 11 () 1・2号住居跡出土土器
- 12 () 9号溝状造構、4号土坑出土土器
- 13 () 平安時代の土器(造構外出土)
- 14 (美山遺跡) 繩文時代の土器・石器、平安時代の土器(造構外出土)
- 15 () 平安時代・中世の土器(造構外出土)

写 真

- 16 遺跡空中写真
- 17 (鶴口下遺跡) 遺跡近景(調査前), 遺跡近景(調査中), 遺跡層序
- 18 () 調査風景(2~3D区)(2~5G区)
- 19 () V層下試掘状態, 繩文時代遺物出土状態, 打製石斧出土状態, 1号集石検出状態
- 20 () 1号住居跡
- 21 () 2号住居跡
- 22 () 1号溝状造構, 2号溝状造構, 3号溝状造構
- 23 () 6号溝状造構, 8号溝状造構, 9号溝状造構
- 24 () 1~4・6・8・9号溝状造構土層断面, 9号溝状造構土器出土状態
- 25 () 土師器甕出土状態, 灰釉陶器出土状態, 4号土坑土器出土状態
- 26 (美山遺跡) 遺跡近景, 遺跡層序, 調査風景
- 27 () 調査風景, 攪乱状態(1・2B区)(3B・C区)

- 28 (鰐口下遺跡) 縄文時代の土器 (遺構外出土)
 29 () 縄文時代の石器 (遺構外出土)
 30 () 縄文時代の石器 (遺構外出土)
 31 () 1・2号住居跡出土土器
 32 () 2号住居跡出土土器, 9号溝状遺構出土土器, 4号土坑出土土器
 33 () 4号土坑出土土器
 34 () 灰釉陶器, 平安時代の土器 (遺構外出土)
 35 () 土師器甕 (4D3区出土), 須恵器タタキ・当て具痕
 36 () 須恵器タタキ・当て具痕
 37 (美山遺跡) 縄文時代の土器・石器, 平安時代の須恵器 (遺構外出土)
 38 () 平安時代の土師器 (遺構外出土), 須恵器タタキ・当て具痕
 39 () 平安時代の須恵器タタキ・当て具痕

挿図目次

第1図	遺跡の位置	3
第2図	周辺の地形	3
第3図	周辺の遺跡	4
第4図	グリッド表示法	5
第5図	グリッド設定図	5
第6図	層序図 (鰐口下遺跡)	7
第7図	鰐口下遺跡遺構全体図	9
第8図	灰釉陶器	17
第9図	須恵器拓影	18
第10図	層序図 (美山遺跡)	19
第11図	新潟県内における北陸系土器出土遺跡	23
第12図	新潟県内出土の北陸系土器	24

表目次

第1表	石器一覧表 (鰐口下遺跡)	15
第2表	石器一覧表 (美山遺跡)	20

第一章 序 説

1. 調査に至る経緯

北陸自動車道建設に係る糸魚川地区の遺跡分布・確認調査は昭和58年度から本格的に行い、発掘調査は昭和60年度と61年度に実施した。

鰐口下遺跡は昭和58年4月の分布調査で土師器・須恵器が表面採集されたことによって遺跡として登録され、昭和58年5月11日付け教文第345号で日本道路公团新潟建設局（以下公團と略す）に通知された。この通知に基づいて公團は、新潟県教育委員会（以下県教委と略す）に対して鰐口下遺跡の内容等を把握するための確認調査を早期に実施して欲しいとの要請を行った。県教委はこの要請に応じて昭和59年8月末に確認調査を行ったが、遺構・遺物は発見されなかった。この調査結果は「北陸自動車道（糸魚川地区）遺跡試掘調査及び取り扱い案」として昭和59年11月29日付け教文第917号で公團に通知され、その中で鰐口下遺跡は発掘調査の必要のない遺跡として取り扱われた。

その後、昭和60年8月から東側に隣接する原山・大塚遺跡の発掘調査が始まったが、この調査中に土師器片等が鰐口下遺跡から表面採集されたことや美山遺跡の範囲が法線内に延びる可能性が生じたことから、県教委は両遺跡を対象に再度確認調査を行う必要があると判断し、同年9月26日～10月9日の間に確認調査を実施した。その結果、両遺跡からは、平安時代の所産と考えられる土師器と須恵器が十数片ずつ出土したほか、不明瞭ではあるが遺物包含層も確認された。それ故、県教委は美山・鰐口下の両遺跡を発掘調査の必要な遺跡として再登録し、工事工程に支障をきたさないことを前提に昭和61年度に発掘調査を行うことで公團と合意した。

2. 調査体制（本調査）

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 田中邦正）

管理 総括 大塚克夫（新潟県教育庁文化行政課長）

管理 田中浩一（ * 課長補佐）

庶務 土田 琨（ * 主事）

調査 調査指導 中島栄一（ * 埋蔵文化財係長）

調査担当 鈴木俊成（ * 文化財専門員）

調査職員 高橋昌也（ * 文化財専門員）

調査職員 遠藤孝司（ * 文化財調査員）

調査職員 川村浩司（ * 文化財専門員）

調査職員 國島 啓（ * 文化財専門員）

調査作業員 地元糸魚川市・青海町の方々にお願いした。

第Ⅱ章 遺跡の位置と周辺の環境

1. 位置と地形

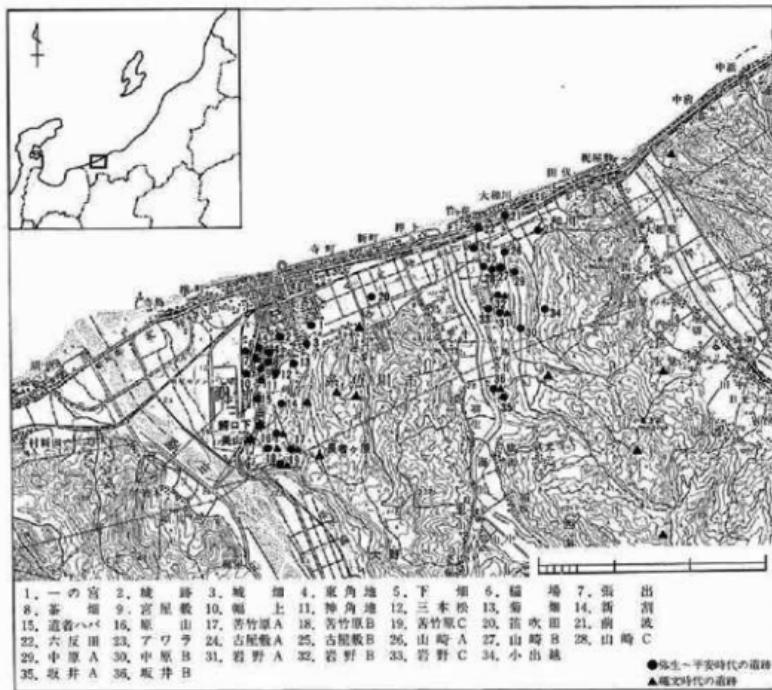
鰐口下・美山の両遺跡は新潟県糸魚川市に所在し、市内を流れる姫川の河口付近に形成された段丘上に立地する。

糸魚川市は本県の南西部に位置する面積約467km²、人口約35,000人の都市であり、南は長野県、西は富山県と境を接している。市域の大部分を山地・丘陵が占め平地が少ない。このため、市街は姫川河口から海岸線に沿って北東方向に細長く延び、他の集落も市内を流れる中小の河川に沿った狭長な低地に集中している（第1図）。姫川は、いわゆる糸魚川一静岡構造線に沿ってほぼ南北方向に流れる当市最大の河川であり、その河口付近には扇状地が開け、右岸には数段の段丘地形が認められる（第2図）。同様の段丘はまた海川河口の右岸流域にも発達しており、遺跡の多くはこれらの段丘上に立地する（第1図）。段丘は高位の洪積段丘から低位の沖積段丘まで6段（Gt I～VI）に細分され（第2図）[鈴木 1983]、鰐口下遺跡はGt III面上、美山遺跡はGt IV面上にそれぞれ立地する。

2. 周辺の環境

周辺の遺跡を段丘ごとに概観すると鰐口下遺跡と同じ段丘（Gt III）面上には、道者ハバ（昭和59年度市教委調査）、神角地・宮屋敷など奈良・平安時代の各遺跡が立地している。これよりも一段高位の段丘（Gt II）面上には、三本松・新割（昭和56年度市教委調査）等の奈良・平安時代の遺跡や、原山・大塚の両遺跡（昭和60・61年度県教委調査）や苦竹原A・苦竹原B・苦竹原Cの各遺跡が分布する。さらに高位の段丘（Gt I）面には、国指定史跡の長者ヶ原遺跡をはじめとして三屋原・塚ノ越・四割・杉沢（いずれも昭和60・61年度県教委調査）など律文時代の各遺跡が立地している。一方、美山遺跡の立地する段丘（Gt IV）面は姫川流域では他に確認されず、海川流域に点在するのみである。これより低位の段丘（Gt V・Gt VI）面上には、一の宮・下畠・稲場・幡上などの各遺跡が分布し、古式土師器を出土する一ノ宮遺跡を除き、他はすべて奈良・平安時代の遺跡である。

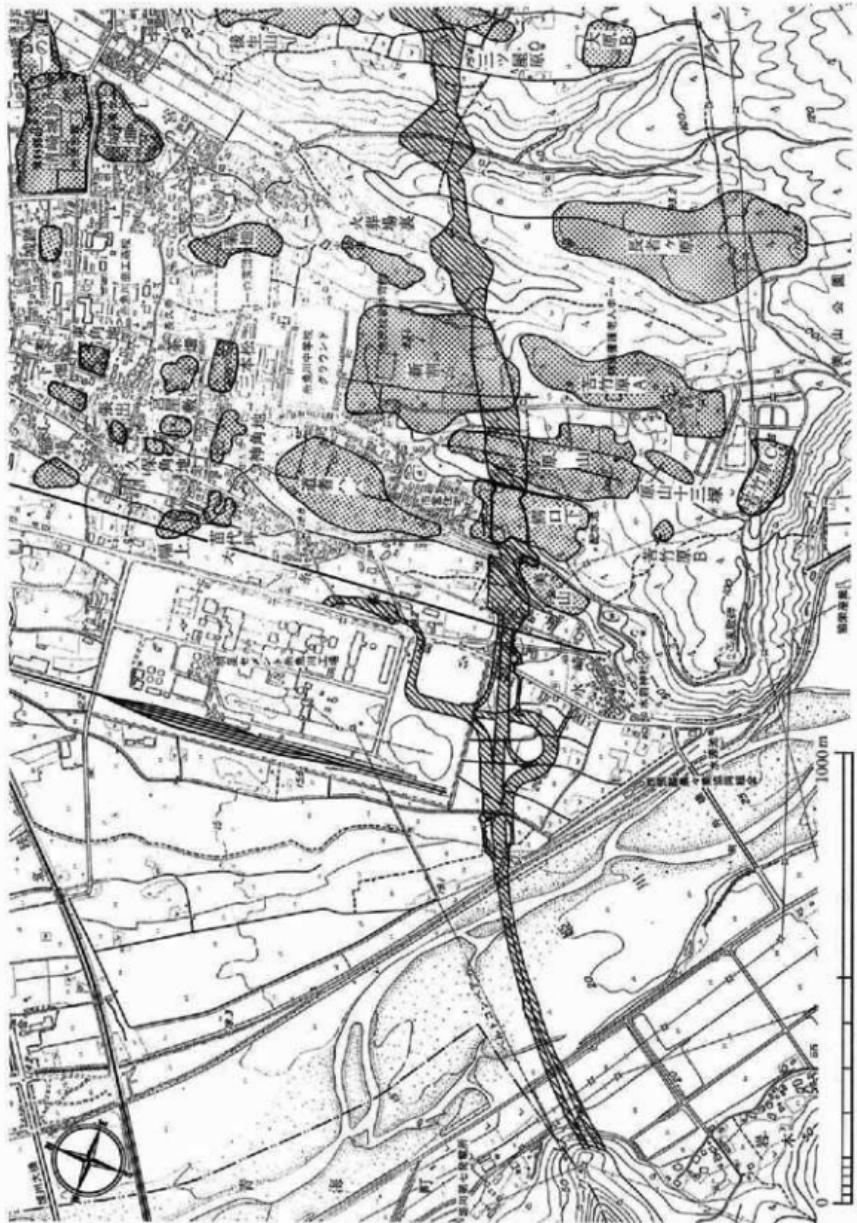
以上のように、鰐口下・美山両遺跡の周辺には多くの遺跡が密集し、時代別にみれば奈良・平安時代の遺跡が多いことに気づく。中でも道者ハバ遺跡は、狭い調査範囲から建物跡5基・井戸1基が検出され、多量の須恵器・土師器に混じって灰釉・綠釉陶器片や墨書き土器、転用硯などが多く出土し、奈良・平安時代において当地方の中心的役割を担った集落と推定されている。鰐口下遺跡からも完形の灰釉陶器や墨書き土器片が出土しており、出土遺物から、あるいは位置的にも強い関連性を有する遺跡と考えられる。



第1図 遺跡の位置と環境 (国土地理院「糸魚川」1:50,000原図 昭和44年発行)



第2図 周辺の地形



第3図 周辺の遺跡 (原図・糸魚川市役所発行 1:10,000地形図 昭和55年)

第三章 調査の概要

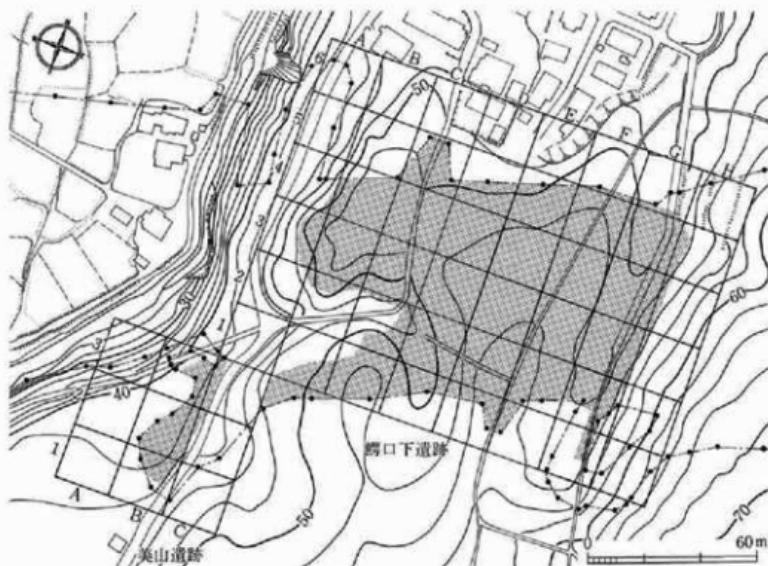
1. 調査の方法

A 蟹口下遺跡

グリッドは、調査範囲の東側に隣接する原山遺跡 [寺崎 1988] の基準に合わせ、南北・東西方向へ各20mの区画を碁盤目状に配した(第5図)。各区の表示方法は調査範囲の南西隅を起点に東方向(x軸)へA・B・C……、北方向(y軸)へ1・2・3……とし、各調査区の呼称はy→x軸の符号の順に3D区、4D区とした。また、調査精度を高めるため、上記した区画(大グリッド)をさらに4×4mの小グリッドで25区画に細分した(第4図)。

21				25
1	2	3	4	5

第4図 グリッド表示法



第5図 グリッド設定図

調査は昭和61年4月1日から開始した。当初より道路公団から要望のあった調査範囲外東側（原山遺跡）台地の掘削用道路確保のため、工事工程と歩調を合わせ進められた。つまり、掘削用道路部分にあたる2～5D・5E～G区付近とそれを挟んだ東・西の部分とに調査区を3分し、工事着手の優先順位により掘削用道路部分→西側→東側とそれぞれ各地区を終了させながら調査を進行させた。また、1C区を中心とする南側に連なる台地の先端部は当初調査範囲でなかったが、調査中に遺物が表面採集され、地形的にも良好であったため新しく鶴口下遺跡に含め調査対象とした。遺跡は遺物包含層が薄く遺物量も少ないとから、基本的に表土をバッカホー、包含層以下を人力で調査した。また遺物は遺構出土のものを除き、小グリッド毎に出土層位を記入し取り上げた。現場での全ての作業が終了したのが昭和61年7月26日（西側の部分は同年6月10日に終了）であり、調査面積は約9,500m²にのぼる。

B 美山遺跡

グリッド設定の基準・調査方法は、鶴口下遺跡と同様である。本遺跡も工事工程の都合上、3B区の1部を昭和61年4月7日～12日に先行調査し、残りの部分は5月23日～6月13日に実施した。調査面積は約600m²である。

2. 整理

報告書に伴う整理作業は、昭和62年11月から翌年3月にかけてであったが、62年中は残務整理のため、作業員1名程度でグリッド分け・土器接合等の作業を行い、翌年1月より本格的な整理作業を開始した。遺物洗浄・注記作業は、一部を除きほぼ発掘調査の期間中に終了している。出土土器は量が少ないので復元可能な個体が多く、接合・復元作業にかなりの日数を費やし、人員を投入した。



実測作業



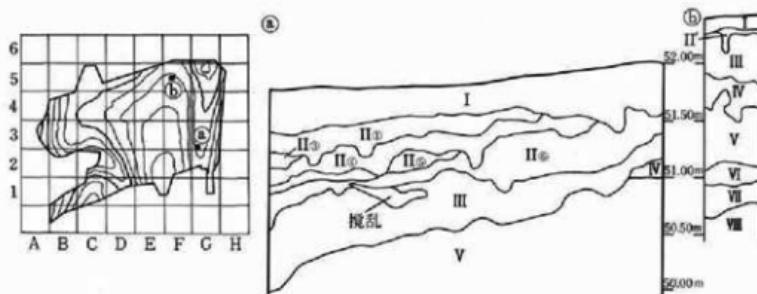
土器接合作業

第Ⅳ章 鰐口下遺跡

1. 層序

調査範囲の現状は植林地・畑地・荒蕪地であり、地形的には大きく台地と沢部に分かれる。台地上での平安時代遺物包含層（Ⅱ層）は、遺構内で認められる以外、低地へ流失している。そして沢の中心部ではⅡ①・Ⅱ②・Ⅱ③に分層され、遺物はその中でも特にⅡ③層に多く含まれている。遺構確認面は、台地上でⅢ層上面、沢部はⅡ④層上面である。また、縄文時代の遺物包含層であるⅡ'・Ⅲ層は台地上でも良好に残っており、遺物は主にⅡ'層とⅢ層の上部に出土する。これらの層は沢部に至ってⅡ'層はⅡ④・Ⅱ⑤・Ⅱ⑥層に分層され、Ⅲ層は厚く堆積する。遺物はⅡ④・Ⅱ⑤・Ⅱ⑥層を中心に多く出土している。次に台地上で認められる各層を、周辺遺跡と対比し、大まかな時期設定を試みたい。Ⅱ層は小出越遺跡〔遠藤 1988〕Ⅱ層に対比され、台地上ではほとんど流失するものの、平安時代遺構の覆土となっている。また、Ⅱ'層は大塚遺跡〔田中 1988a〕の沢部Ⅱb・Ⅱc・Ⅲ・Ⅳ層に対比され、本遺跡の状況と合わせると弥生時代から縄文時代後期の時期が該当しそうである。Ⅲ層は小出越遺跡Ⅳ層・岩野B遺跡〔高橋 1986〕Ⅲ層・大塚遺跡V層に対比される。そして、これらの層で縄文時代早・前期の遺物が出土することから、縄文時代前半の時期に比定される。またV層以下は、本遺跡で試掘したにもかかわらず遺構・遺物は確認されなかった。しかし大塚遺跡で、この層よりAT降下層準が確認されており、縄文時代以前に比定される。

以下、本遺跡の土層堆積状態を代表する台地上（5F区）と沢部（2G区）の土層柱状図を示し、各層について説明を加える。



第6図 鰐口下遺跡層序

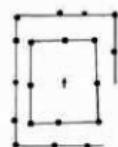
- I 層 黒褐色土 耕作土、3~4mm大の黄褐色土粒子をわずかに含む。
- II 層 黒褐色土 粘質土で炭化粒を含む。
- II①層 暗褐色土 粘質土で1~3mm大の黄灰色粒子を少量含む。
- II②層 暗褐色土 II層に近似するが明るい色調を呈する。
- II' 層 暗褐色土 II層とIII層の漸移層的存在であり、炭化物を少量含む。
- II③層 暗褐色土 粘質土で、黄灰色粘土が鹿の子状に含まれる。
- II④層 にぶい黄橙色土 II③層に近似するが、黄灰色粘土の含有が多い。
- II⑤層 暗褐色土 II'層に似るが、粘性が強い。
- III 層 黄褐色土 粘性・締まりともに弱い。1~3mm大の炭化粒を少量含む。
- IV 層 明褐色土 V層が細かなブロック状に崩壊している。1~4mm大の炭化粒を少量含む。
- V 層 明褐色土 硬い粘質土で1~5mm大の赤色粒子を含む。
- VI 層 明褐色土 V層に比べ赤色粒子が多く含まれる。
- VII 層 明褐色土 VI層に近似するが、灰白色粘土がブロック状に散見される。
- VIII 層 明褐色土 VII層に近似するが、灰白色粘土ブロックは見られない。

2. 遺構

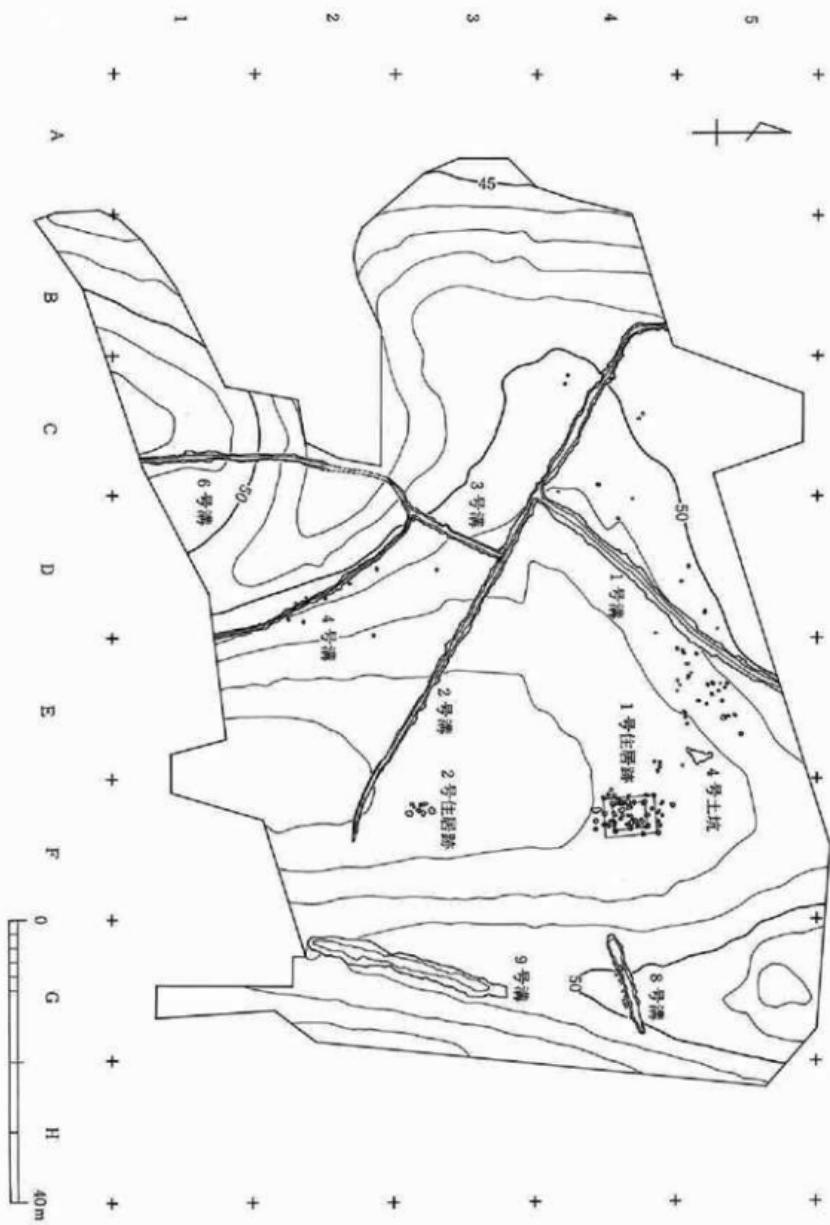
遺跡を概観すると（第7図）、まず目に付くのが発掘区を縱横に走る溝である。大小合わせて7基の溝状遺構が検出されている。次に、台地上の比較的平坦な面に集中する無数のピット群がある。4F区のピット群は1号住居跡の柱穴と思われるものであり、3F区のそれは2号住居跡に伴うものと考えられる。単独の土坑としては、5E区南東隅に位置する4号土坑がある。木根による擾乱を受けプランは明確でないが、3個体の甕を一括出土している。この他に3E区で2基の集石遺構が検出されている。

1号住居跡（図版5）

4F区はほぼ中央に位置する据立柱建物（N—7°—W）である。身舎は桁行2間（4.5m）×梁間2間（3.6~3.9m）で東・西桁行の柱間寸法は比較的よく対応しており、北から2.2m・2.5mである。梁間は不揃いで、南側中央の柱穴が西に偏る配置を示す。身舎を取り囲むようなピット列は廂と考えられ、東西に1m前後、南北に約1.2m程張り出す。しかし身舎柱穴との通りが悪く柱間寸法も不揃いでであることから漏れ縫の可能性もある。南東部は水道管理設溝によって破壊されている。柱穴掘形は径50~70cmの不整円形を呈し、深度24~45cmを測る。覆土はII・III層混合土と考えられるよくしまった褐色土を主体とするが、ピット135・173のように焼土塊のつまつたものもある。大半のピットから遺物が出土し、ピット114のように土師器片を多量に含むものやピット100・161のように須恵器甕片



1号住居跡模式図



第7圖 窩口下遺跡遺構全體圖

を含むもの、ピット141・167のように焼け粋の入るものもある。また、4号土坑出土の須恵器壺81と同一個体と思われる破片がピット112・143・167・169から出土している。これら覆土の状態と出土遺物から、平安時代の住居跡と考えられる。

2号住居跡（図版6）

3F区の南西隅に位置する焼け粋を伴うほぼ円形の焼土範囲と、これを囲むように位置する土坑やピット群で、検出面からは壺・鍋・壺等の土師器片がまとまって出土している。焼け粋は擾乱のため四方に散乱するが、S11のみは焼土脇に直立し、焼土側の面が赤変していることから、原位置を保っていると考えられる。ピットは、焼土部分と並ぶように11号土坑が、これを挟んで南に1号土坑・北に2号土坑が位置する。他のピットはこれらの西側でのみ検出され、東側部分は1号住居跡同様水道管理設溝により破壊されているため不明である。1号土坑の開口部は長径約100cm・短径約75cmの不整円形を呈すが、基底部は径約35cmの円形である。底部はやや丸味をおび、壁はほぼまっすぐに立ち上がり段をもって内湾気味に開口する。深度約40cmを測り、覆土は段を境として上下2層に分けられる。上層は土師器碗56が、下層からは杯53・54・55が、いずれも内面を上に向かた状態で出土している。2号土坑は開口部・基底部ともに不整円形状を呈し、壁はまっすぐに立ち上がる。径約80~90cm・深度約35cmを測る。11号土坑は長径約65cm・短径約55cmの梢円形状を呈し、深度は約35cmを測り、壁はほぼまっすぐに立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積し、3層に分けられる。最下層から土師器非ロクロ成形壺61の底部片と須恵器壺59が、中位の層から鍋65の体部片が、上層から土師器壺60がそれぞれ出土している。

4号土坑（図版4）

5E区南東隅に位置する。木根による擾乱著しく、平面プランは確認できなかった。図中の破線は、断面の状況と遺物の出土範囲より復元したものである。深度30cmを測り、覆土は上下2層に分けられる。上層より土師器非ロクロ成形壺78・79と須恵器壺81の体部破片が出土している。

78・79は粉碎されたかのように崩壊し、すべてが2~5cm角の細片と化して混じり合っていたが、いずれも1個体分が出土した。81は78・79よりも上層に重なって出土した。大半が接合し完形時の1/8程度になるが、体部下半の破片のみである。同一個体と思われる破片が1号住居跡をはじめとして4F・G区に散布し、沢部2G区の9号溝内からも出土していることから破損した後4号土坑に廃棄された可能性も考えられる。出土遺物と覆土の状況から平安時代の遺構と考えられる。

1号溝（図版1・2）

4D区から5E区にかけて検出され、南西一北東方向に延びる。南端は2号溝に接続し、約44m延長して北端は法線外へ抜けている。等高線にはばらばらに延びるため傾斜は緩やかである。幅1.5~2mで検出面からの深度は50~70cmを測り、底部は比較的平坦で壁は斜めに立ち上が

る。部分的に段を有する。覆土は7層に細分されるが、大半はⅡ層およびⅢ'層の土を主体とする混合土である。各層にわたって若干の土師器・須恵器片が出土している。

2号溝(図版1・2・3)

発掘区のはば中央部を南東一北西方向に延びる。検出面での幅0.5~1.5m、深度20~40cmを測り、延長は約86mと最も長い。傾斜に従って一直線に延び、西端は4B区内で北方向に屈曲して法線外に抜ける。東の端部は2F18で徐々にせばまり、緩やかに立ち上がる。覆土はⅡ層土を主体とし、土師器・須恵器の細片を含む。3D21区に溝状造構をもつ。

3号溝(図版1・2)

3D区から2C区にかけて検出された。北端部は3D区で2号溝に接続し、北北東一南南西方向にはば一直線に延び、4号溝との接続部分から南西に方向を変え2C区に抜ける。2号溝~4号溝の間は幅約1mと一定であるが、その後徐々にせばまる。これに対して深度は10~30cmと一定せず、傾斜角が大きくなるに従って深くなる。延長は図上で約20mを測るが、途切れながらも6号溝の方向に延びており、接続する可能性が強い。覆土は2号溝に対比が可能である。

4号溝(図版1・2)

1D・E区の境界付近から等高線にはば沿う形で北西方向に延び、3D1区で3号溝に接続する。延長は約33mを測り、幅30~90cm、深度20~40cmを測る。数基のピットが溝に沿って一定の間隔で検出されている。覆土は2号溝に対比される。

6号溝(図版1・2)

南西部の舌状にせりだした台地から沢部に向かってはば南北に延びる。延長は約26m沢底部では新しい排水溝によって分断されるが、3号溝に向かってさらに延びるものと思われる。幅70~100cm、深度20~30cmを測る。覆土はⅡ層土を主体とする褐色土で土師器片を若干含んでいる。

8号溝(図版4)

4G区で検出された溝状造構である。北に向かって開析する沢を横切ってはば東西に延び、延長は約15m。両端を丸くおさめ、西端部にテラスをもつ。検出面での幅1.5m前後、深度50~65cmを測る。底部は比較的平坦で壁は外反ぎみに立ち上がる。沢部Ⅱ④層を掘り込んでおり覆土は黒褐色あるいは暗褐色のよくしまった土でⅡ層土を主体としている。南側に柵列の可能性を有するピットを伴う。

9号溝(図版4)

2G・3G区で検出された。沢筋にはば沿う形で南北に延び、延長は29mを測る。南端を丸くおさめ、北端は平坦で立ち上がりが不明瞭である。8号溝同様Ⅱ④層から掘り込まれており、最大幅約4.5m、深度70~80cmを測る。底部は丸味を帯び壁は内湾ぎみに立ち上がる。覆土は5層に分けられるが、いずれもⅡ層土を主体とするよくしまった暗褐色土である。北端部の3G13・18区から遺物がまとまって出土している。須恵器杯73および土師器壺74~77がそれで、

図版4下にあるような配置を示す。出土レベルは74・76が他よりも5~10cm程度低いが、いずれもⅢ層土中から出土している。

その他の遺構（図版3）

①1号集石 3E6区のⅢ層掘削時に検出された遺構である。総数6個の砾が東西約38cm、南北約52cmの範囲に集中する。砾以外の遺物を含まず、焼土・炭化物等の分布も見られない。また土坑等の下部施設も確認されなかった。それぞれのレベル差は小さく、4~7cmを測る。1を除いた他はすべて扁平な砾で2・5は角砾である。3・4・5の表面には、タール状の黒色を呈する付着物が観察される。検出面の層位から縄文時代の遺構と考えられる。

②2号集石 3E6区、1号集石の北西約2mの地点で検出された。6個の砾が東西約72cm、南北約46cmの範囲に散乱する。他の遺物・焼土・炭化物等は検出されず、下部施設も確認されなかった。それぞれのレベル差は小さく2~4cmを測る。1以外の砾(2~6)はほぼ同レベルで、すべてが接合する資料である。1は安山岩、2~6は粘板岩で表面に酸化鉄の付着が観察される。1号集石同様Ⅲ層土中から検出されている。

③打製石斧出土地点 台地先端の緩斜面、4C7区で2本の打製石斧(25・26)が並列して出土している。いずれも原石面を上に、刃部を北東方向(25はN-15°-E、26はN-30°-E)に向けた状態でⅢ層上面から出土した。配置に一定の規則性がみられることから、並置されたものと考えられる。掘り込み等の施設は検出されなかった。

④土師器壺出土地点 4D3区で土師器壺89が単独で出土している。本来完形のものが土圧等によってつぶれたものと考えられる。南北軸にはば沿う形で口を南、底部を北に向けて出土した。Ⅱ'層掘削時に検出されたもので、トレンチによっても明確な掘り込みが確認されなかった。なお、壺内からは暗褐色を呈する土が若干検出されたのみである。

⑤灰釉陶器出土地点 4E区で検出されたくぼ地状の浅い土坑より灰釉の碗(第8図)が単独で出土している。土坑は長径100cm・短径45cmの梢円形を呈し、深度15cmを測る。掘り込みが浅く壁の立ち上がりも不明瞭であることから、土坑の上部が削平され、底部のみ残存している可能性も考えられる。覆土は暗褐色を呈しⅢ層土を若干含む。碗は完形品で内面を上に向けて出土しており、土坑底面とのレベル差は8cmを測る。

⑥橋状遺構 3D21区で検出された。2号溝の両端に配置する礎石状の砾(1・2・3)である。いずれも径20~30cm大の扁平な砾で、1と2は2号溝を挟んで対応し、3は1と約1.5mの間隔で同じ側に配置する。3に対応する4の位置に砾は検出されなかったが、若干のくぼみが確認されたことから、砾のみ移動されたものと思われる。性格は必ずしも明らかでないが、いずれも扁平な砾を使用し、溝の両側に対応することから橋板の礎石もしくはこれを固定するためのものと考えられる。

3. 遺 物

縄文時代・弥生時代

縄文時代の土器は、中期末葉から晩期末葉にわたる。しかし個体数は少なく、いずれもⅡ'層（包含層）中で出土しており、造構に伴った例はない。また弥生時代の土器についても、一片を認めたのみである。以下、時期をおって説明を加える。

土器（図版7）

縄文土器 7はLR単節斜縄文を施した胴部破片、8は継位に細かい沈線とRL単節縄文が施文された底部付近の破片である。明確ではないが、胎土・焼成・縄文等からいざれも中期末葉から後期初頭に属するであろう。

9・11・12は後期初頭、北陸系の深鉢形土器である。11の器形は、胴下部に張りをもち内湾気味に立ち上がる。やや長めの頸部は直立し、口縁は大きく外反する。頸部に集約された文様帶は、沈線と列点により三段構成をとる。上段と下段には、浅く幅広な平行沈線が二条横走し、その間を押し引き手法の横位列点文が二列巡る。中段は「B」字状を呈するような沈線が垂下する。いざれも同様なヘラ状工具を用いている。9は口縁部、12は底部から胴部下半にかけての破片である。9のやや肥厚した口縁部以外は、三点とも胴部地文にRL前後段多条縄文が縱走する点で共通する。

10は後期後葉の注口土器もしくは壺形土器と思われる。三条の平行沈線が等間隔で巡る。体部の張り出し部は隆帯状を呈し、RL直前段多条縄文が斜位に施される。

13は晩期末葉、いわゆる浮線文系の深鉢形土器である。胴部が緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。また口縁部外面には小隆起が等間隔に貼付され、その間を沈線で埋めている。文様帶は頸部に位置する。しかし施文順序としては、まず器面全体に細密条痕を継位に施文する。その後、頸部に平行沈線帯と工字文風のモチーフが描かれ、胴部にはそのまま地文として条痕が残される。胎土、文様構成等から信州系の土器と判断される。

弥生土器 14は、高環形土器の体部破片である。文様帶の幅から、沈線で描かれた変形工字文は、多段化すると考えられる。内面は丁寧なハラミガキが施され、平滑に仕上げられている。類例は、糸魚川市大塚遺跡〔田中 1988 b〕の高環AII類、西蒲原郡黒崎町緒立遺跡〔磯崎・上原 1969〕のA群土器に求められ、東北系の土器である。

石器（図版7～10）

出土層位はⅡ'層からⅢ層上部にかけてが多く、一部I・Ⅱ層より出土している。調査範囲内での分布状態は、2～5・D～F区の台地上からのものがほとんどで、一部2～5G区の沢部に散布している。石器の内訳は、石鏃1・石匙1・磨製石斧13・打製石斧7・砾器4・石錘2・凹石2・磨石2・石皿2・石核24・剥片96が含まれる。その他、玉作り関係遺物として素材1・石核1・砥石3が含まれる。以下、器種別に説明する（出土区・石質等は表1を参照）。

石鎌 (15) 五角形の凹基無茎鎌である。裏面には大きく主要剝離面を残す。五角形鎌は縦文時代晚期に多出する形態であるが、該期のものに比べ非常に薄く精巧な作りである。

石匙 (16) 縦長の薄い剝片を素材とし、右側辺と縁部に細かな二次加工が施される。つまみ部の抉りは右側縁のみに付く。

磨製石斧 (17~24) 乳棒状(17)・定角式(18~20)があり。その他、部分磨製のもの(21)と未成品と思われるもの(22~24)が出土している。17は刃部の欠損品で刃先は研磨されるが、上位に敲打痕が残る。本遺跡出土磨製石斧の中にあって、石質・技法・形態等異質であり、他地域からの搬入品と考えられる。19・20は側辺が研磨されており、19の刃部付近には使用の結果と思われる光沢が見られる。18は大きさ形態ともに20に似るが、研磨が隣まで施されず原石面を大きく残し片側辺を大まかに剝離により形状を整えている。21は片面に原石面を残す横長の剝片を素材とし、両側辺を中心に剝離を加え形状を整えている。正・裏面にみられる部分的な研磨面は剝離の後に施される。22~24は未成品と考えておくが、中でも23・24は敲打・研磨を兼ねた工具とも考えられる。22は、大型厚手剝片の全周に形状を整えるため剝離が加えられ、その後、正面の一部に研磨が始められる。23は、厚手楕円縫の片側辺に敲打→研磨が施され、正・裏面の一部にも研磨面が見られる。24は、敲打とも剝離ともつかぬ加工が全面に見られ、その後、正・裏面に対し研磨が施される。

打製石斧 (25~30) 摂形(25~29)・短圓形(30)があり、全体的に大型品で占められる。素材は縛表皮を片面にもつ横長剝片(25~29)が一般的で、30のように扁平な縫をそのまま素材とするものは1点のみである。25・26は隣接して出土した(図版3)。刃部は非常に薄く、使用による欠損等がまったく見られないことから、使用前のものと考えられる。31は扁平楕円縫の両側辺に剝離が加わるもので、器種名は不明である。

礪器 (32~34) 楕円または円形の縫を使用し、片面のみに剝離を加えた片刃礪器である。刃部縁辺には使用の結果と思われる刃潰れが見られる。

石鍤 (35) 楕円扁平な自然縫を利用した縫石鍤である。

剝片 (36~40・42) 正・裏面が剝離面で構成されるものと、縛表皮を剥ぎ取ったように正面に原石面を残すものに大別される。前者は4点と少なく大多数は後者によって占められる。図示したものは、その中でも使用痕と思われる縫辺への磨耗や刃潰れが認められるもの(36~40)と、接合資料(42)である。42は縦長剝片2点と横長剝片1点がそれぞれ接合する。出土地点は、いずれも3D10区である。

石核 (41) 剝離作業は進展せず、剝片を1・2個剥ぎ取ったような残核で占められる。

凹石 (47) 扁平な楕円縫の正・裏面に複数の凹部をもつ。

磨石 (48・49) 扁平な円縫の片面(48)・正裏面(49)に磨面をもつ。

石皿 (50・51) 50は扁平で周辺が丸味を持たない縫を素材とし、片面のみに広い磨面をもつ。51は扁平な縫の周辺に粗い敲打が施された片面に磨面をもつ。

玉作り関係遺物 (43~46) 玉類の素材となる剝片(43)・石核(46)が出土している。いずれも硬玉製で、両者は同一母岩の可能性がある。46は両極打法による荒割りと考えられる。玉作りに付随するものとして砥石(44・45)がある。いずれも破片で、作業面の観察では筋砥・内磨砥といった凹・凸は見られない。

第1表 石器一覧表

No.	器種	出土 地點	出土 層位	石質	No.	器種	出土 地點	出土 層位	石質	No.	器種	出土 地點	出土 層位	石質
15	石鏃	2G		チャート	27	打製石斧	5G 23	II'	頁岩	39	剝片	4G 10	II'	砂岩
16	石匙	4G 1	III	メノウ	28	打製石斧	4C	II	砂岩	40	剝片	4G 2	II'	流紋岩
17	磨製石斧	2D 16	II'	粘土片岩	29	打製石斧	4E 11	III	砂岩	41	石核	5C	II	頁岩
18	磨製石斧	3A 20	III	蛇紋岩	30	打製石斧	3G 14~15	II'	蛇紋岩	42	剝片	3D 10	III	頁岩
19	磨製石斧	4B 18	III	蛇紋岩	31	?	5E 19	II	蛇紋岩	43	王剝片	3D 75	II	硬玉
20	磨製石斧	2F 20	III	蛇紋岩	32	穀器	4F 12	I	頁岩	44	砥石	4F 17	I	砂岩
21	磨製石斧	2E 24	III	蛇紋岩	33	穀器	4D 1	II	頁岩	45	砥石	4F 22	I'	砂岩
22	磨製石斧?	4D 19	II	蛇紋岩	34	穀器	4D 9	III	砂岩	46	王石核	4E	表	硬玉
23	磨製石斧	3F 5	I	蛇紋岩	35	石鍤	1G		安山岩	47	凹石	5G	II'	安山岩
24	磨製石斧	2G 15	I	蛇紋岩	36	剝片	3E 7	II	粘土片岩	48	磨石	4D 5	II	花崗岩
25	打製石斧	4D 3	III	砂岩	37	剝片	1C	III	頁岩	49	磨石	5C	II	安山岩
26	打製石斧	4D 3	III	砂岩	38	剝片	4B 7	III	頁岩	50	石頭	1C	III	安山岩
										51	石頭	1号溝		砂岩

平安時代

1号住居跡出土遺物 (第9図4・5, 図版11 67~72)

本遺構を中心とする範囲 (4F区) には、比較的土器が多く出土しているが、細片が多い。またピット出土のものも細片が殆どである。したがってここでは、ピット102出土の遺存の比較的良好な土師器壺(67)とピット114出土の底部の内外面にヘラ記号が付く土師器壺(68~72)を取り扱い、他は包含層出土として整理した。また周辺からは、甕(4・5)・短頭瓶・長頭瓶の須恵器片が多数出土している。

67は、身が比較的深く、底部は回転糸切りである。口縁部は若干外反し、内面は滑らかに仕上げられる。68~72の色調は橙色で、胎土は沙っぽい。68は体部下半に回転を利用したヘラ削りが施されるが、削りによって器面がかなりさざくれ立っていることから乾燥する前の柔らかい時点での施されている。2号住居出土の55と形態・技法等極めて似ている。70は底部内面に他は底部外面にそれぞれ「+」字状にヘラ記号が付く。ヘラ記号は器面が乾燥した時点で付けられており、沈線は浅い。

2号住居跡出土遺物 (図版11 52~66)

3基の土坑と4基のピット、それに焼土範囲より構成される。遺存度の良い土器が1号土坑・11号土坑・ピット8・焼土範囲から出土しており、ここではそれらを中心に報告する。

1号土坑出土土器 (52~56)　すべて土師器であり、壺6個体以上・碗1個体・非ロクロ成形壺の細片数点が出土している。図示したものは、その中でも残存率の高いものだけであるが底部はすべて回転糸切りである。52~55は壺であるが器壁の厚さ・体部の立ち上がり等バラエティーがある。内面は比較的平滑に仕上げられるが、54だけはロクロ撫での痕を明瞭に残す。55は1号住居出土68に形態・技法等酷似する資料で、内面には不明瞭ながら「X」状のヘラ記号がみられる。同様なヘラ記号は52にも認められる。また54の底部外面には、2本の平行に走る圧痕が観察される。56は碗であり、口縁端部で外反する。54同様、底部に平行に走る圧痕が見られる。

11号土坑出土土器 (59~61)　図示した3個体が出土している。59は底部回転ヘラ切りの須恵器無台壺であり、切り離し後、底部の外周は撫でられる。器面はロクロ撫でにより凸凹しており、底部内面ではそれが特に目立つ。非常に薄い作りである。60は土師器碗と考えられ、内面は比較的滑らかに仕上げられる。61は非ロクロ成形壺で、調整は体部外面で縱位、内面で斜位にハケ目が施されるが、内面の粘土紐の接合痕は消しきれていない。底部外面は、橙色に変色しており二次焼成と考えられる。

焼土範囲出土土器 (62~66)　図示したもの以外、土師器壺の細片が出土している。62~64は非ロクロ成形壺で、口縁端部は細くつまみ上げられ円筒状を呈する。調整は体部外面で縱位、内面は横位のハケ目によるものを基本とする。内面の粘土紐接合痕は消しきれず部分的に残る。62の底部は二次焼成により橙色に変色している。65は土師器鍋であり、頸部の屈曲は不明瞭で口縁端部を内側に折り曲げている。体部中位にはヘラ削りが観察され、その後、体部から底部にかけて平行線文の印きが施される。内面は体部下半で不明瞭ながら円形の当て具痕が観察される。66は遺存状態が極めて良く、器面の磨耗・風化のほとんど見られない土師器壺である。調整は外面体部下半で削りの後、平行線文の印きが施され、内面は扇状の放射線文が観察される。内面体部中位には煤状の黒色付着物が部分的に見られる。

その他、ピット8で58の土師器壺が出土している。遺存状態が極めて良く、調整痕も明瞭である。底部回転糸切り、内面は滑らかに仕上げられており体部には広い範囲で黒斑が見られる。57は1号土坑の西側より出土した土師器壺である。底部は回転糸切り、内面は滑らかに仕上げられる。外面体部には「山」と墨書きが見られる。

4号土坑出土遺物 (図版12 78~81)

図示した土器3個体が出土している。

78・79は非ロクロ成形壺である。78の体部は底部からバケツ状に開き、上位に6個の把手をもつ。外面の調整は口縁部付近で横位、体部で縱位のハケ目が施され、内面は横位のハケ目で調整されるが、粘土紐の接合痕は消しきれていない。内面体部下半と底部の内外面には二次焼成によると思われる器面の剥落が観察され、特に内面は明褐色に変色している。79は体部が円筒状に立ち上がり、口縁端部は細く仕上げられている。外面には縱位のヘラ削りが施された後、

撫でにより表面を柔らかく仕上げている。内面は撫でによって仕上げられるが、粘土繩の接合痕は部分的に消しきれていない。内面体部下半と底部の内外面には、78同様器面の剥落が見られ、二次焼成されたと考えられる。胎土には両者とも、径3mmの大いな小蝶が多く含まれる。80・81は須恵器壺の同一個体で、前者は頸部付近、後者は体部下半の破片である。外面には、木目が平行線に直交する叩き具を用いた平行線文が施される。内面は体部から底部にかけて木目がつく当て具により同心円文が施された後、体部中位から底部にかけて平行線文が施され、前段階の同心円文はほとんど消され部分的に残存するのみである。また、体部の外面には粘土繩と平行に幅5mmほどの線が撫でにより施されている。

灰釉陶器（第8図）

完形の碗で、刷毛により釉がかけられる。口縁端部はやや外反し、高台は「く」の字状に外反する。美濃窯の光ヶ丘1号窯式と思われ、9世紀末に位置づけられる。

9号溝出土遺物（図版12 73～77）

溝の北先端部（3G13）に残りの良い土器がまとめて出土している。図示したもの以外に土師器耳の細片が数点出土している。

73は、底部回転ヘラ切りの須恵器無台环で、器面にはロクロ撫での凹凸を顯著に残す。また内面の底部と体部の境には明瞭に窪みが付く。内外面の広い範囲にはタール状の黒色付着物が見られる。74～77は土師器环で74の底部・75の体部には墨書きが書かれ、75は「力」と読める。両者とも底部回転糸切りである。76・77は口縁部を若干外反させる。

包含層出土遺物（第7図2～6、図版13 82～94）

遺構以外から出土した遺物は、台地頂部の4F区（1号住居付近）・3F区（2号住居付近）を中心に遺物総数の半数以上が出土している。その他の地区では散発的に分布する。ここで扱う資料は、これらの内、遺構内で出土していない器種・特殊なもの・遺存度の良いもの等である。

須恵器（82～88） 蓋・無台环・長頸瓶・短頸壺・小型瓶・壺・横瓶等が出土しているが、細片が多く図化できるものは少ない。82は径16cmを測る大型の蓋で、内面と口縁端部の屈曲は不明瞭である。天井部は回転ヘラ切り後、撫でられ、外周には重ね焼きの接地痕が見られる。83は59・73と同様の作りであり、本遺跡出土の無台环はこのタイプがほとんどである。84は長頸瓶の底部付近の破片であり、体部下半は回転ヘラ削りが施される。85は小型瓶と考えられ、外面には赤褐色の自然釉がかかる。86は広口壺で、調整は胴部外面に平行線文の叩き、内面は同心円の当て具痕をハケ目で部分的に消去している。87は大壺で、調整は胴部外面に平行線文に直交する木目をもつ叩き、内面には同心円文の後撫でが加わっている。胎土には小蝶が多く含まれる。

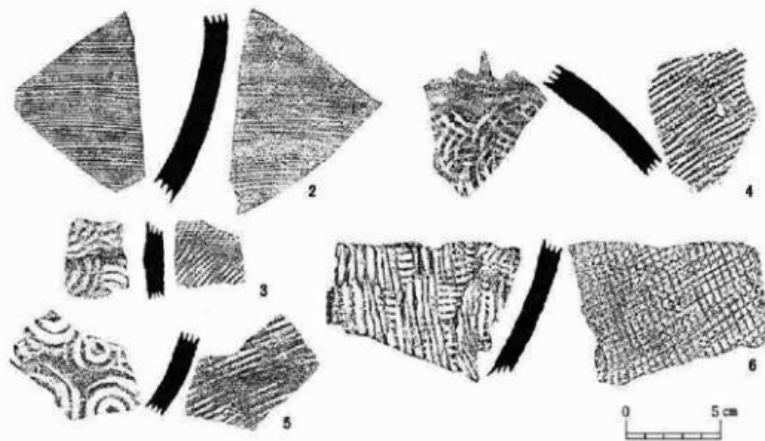
3～6は壺胴部破片である。成形は、3～6の外面は、平行線文に木目がみられ、直交する



第8図 灰釉陶器

ものが、3・4・6であり、3は後にカキ目が施される。5は斜行するもので後にカキ目が施される。内面は3～5が同心円文、6は方向の異なる平行線文が1単位となった當て具を用いる。また木目が明瞭に観察される。88は、横瓶の口で胴部内面は、同心円文を施した後、撫でられている。2は内外ともにカキ目が施されるが、器種は不明である。

土師器(89～94) 壺・碗・黑色土器・壺・非ロクロ成形壺・鍋が出土しているが、細片が多く、ほとんどが壺と非ロクロ成形壺で占められる。89は、口縁端部が内側へ折り返された壺である。外面の体部上半はカキ目により調整され、下半は木目の見られる格子叩きにより成形される。内面下半は、不明瞭な當て具が施された後ハケ目により一部調整される。外面には黒斑が部分的に見られる。90は内面と外面口縁部にのみミガキが施され黑色処理された碗である。底径は小さく身は深い。体部下半に回転を利用した削りが施される。91・92は、底部に墨書きが見られる壺である。93・94は非ロクロ成形壺で、94の内面は指圧痕のみでハケの調整はみられない。また底部外面は橙色に変色し、器面の剥落も見られる。



第9図 須恵器拓影

第V章 美山遺跡

1. 層序

調査範囲の現状は北側で植林地・南側は畠地であり、2B区に東から西に走る浅い埋没した沢が存在する(第5図)。土壤の堆積状態は鰐口下遺跡とほぼ同様であるが、沢部でみられるII層の細分は、部分的に認められるものの鰐口下遺跡ほど明瞭には分離できない。

以下、本遺跡の土層堆積状態を代表する沢部(2G区)と地形的に比較的上位に位置する(5F区)の柱状図を示すが、各土層の説明については、鰐口下遺跡と同様であるため割愛する。

2. 包含層出土の遺物

造構は検出されず、遺物は包含層と現代の耕作土より出土している。

縄文時代(国版14 95~103)

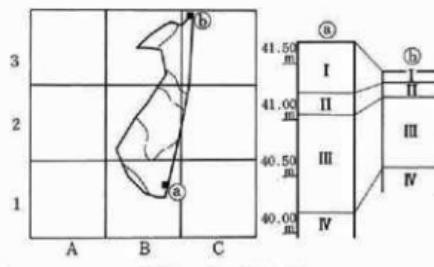
土器3個体・石器21点が出土している。土器は図示したものが全てで縄文時代中期末~後期前葉に比定され、石器も該期の所産と考えられる。石器の内訳は、石錐1・石錘3・磨石1・敲石1と二次加工が施されたものや剥片が数点含まれる。土器・石器とも大半が2B区より出土し、出土層位はII層や擾乱部で、平安時代の遺物と混在する。

土器(95~97)

縄文時代の土器は図示したもの3点のみである。

95は胴上部が緩やかに内湾し、そのまま口縁部に至る深鉢形土器である。肥厚した口縁部にはRLの前々段多条縄文が斜行し、胴部は同じ原体により縱走する。鰐口下遺跡の9の土器と近似し、後期初頭に時期比定できよう。96はLR単節斜縄文が施文された胴下部破片である。胎土・焼成・縄文から中期末葉~後期初頭に位置づけられる。

97は、後期前葉頃之内1式に属する深鉢形土器である。底部から外傾して立ち上がり、体部上半に張りをもつ。頸部でくびれ、口縁部の「く」の字状の内折は鋭く、全体的に変化に富んだ形である。また口縁径に比して器高が低いことも特徴と言えよう。文様は、口縁部のI文様帯と体部のII文様帯に分離し、頸部は無文となる。I文様帯は、8単位の波頂部下に大小の円形竹管文が接するように施され、波頂部間を巡る沈線によって連結される。II文様帯は、地文のRL単節斜縄文に円形竹管文と沈線文が施される。主文様は、沈線で描かれた入組文であり、



第10図 美山遺跡層序

その入組部は波頂部と対応しながら横位に展開する。胎土は緻密で精選され、焼成もきわめて良好である。また内外面共に全面にわたって煤・炭化物が付着し、黒色を呈する。

石器 (98~103)

石鏡 (98) 凹基有茎鏡である。両側縁は鋸歯状に丁寧に仕上げられている。

石錘 (99·100) 99は小型で扁平な円盤を使用し、上・下端に両面から剥離を加え、凹部を作り出した疊石錘である。100は円形の扁平盤の周縁に三方より大まかな剥離が加えられる。

磨石 (102) 円盤の片面に湾曲した磨面をもつ。

敲石 (103) 長楕円盤の一端に、かなり広い範囲に叩き潰れ様の痕跡がみられる。

剝片 (101) 剥口下遺跡で多量に出土する疊表皮を剥ぎ取った剝片であるが、本遺跡においては、僅か3点と数は少ない。

第2表 石器一覧表

No.	器種	出土 地点	出土 層位	石質	No.	器種	出土 地点	出土 層位	石質	No.	器種	出土 地点	出土 層位	石質
98	石鏡	3B	II	流紋岩	100	石錘	2B24	II	砂岩	102	磨石	2B14	II	安山岩
99	石錘	2B13	II	石灰岩	101	剝片	2B18	II	砂岩	103	磨石	2B18	II	安山岩

平安時代(図版14·15 104~149)

須恵器と土師器が出土している。大半が2B区からの出土で、出土層位はII層を中心とする。須恵器の内訳は無台壺、壺、壺、双耳瓶であり、いずれも細片である。土師器は壺、有台壺、有台碗、壺、小型壺、鍋、非ロクロ成形壺、製塙土器があり、須恵器同様、細片が多く個体数の出せない器種もある。

須恵器 (104~113·142~144·146·147)

無台壺 (104~113) 底部破片の識別により、15個体以上が出土しており全て底部は回転ヘラ切りである。104·105の若干器壁が厚いものと、106~113の薄いものとに大別される。前者は、僅か2点と数が少なく、104は胎土に小窪を多く含み、後者の胎土と明瞭に区別される。また、口縁部が粗く、若干外反することや底部を丸く仕上げる特徴等から、本遺跡では最も古い様相を示すと考えられ8世紀代に比定しておく。また、内外面には部分的にタール状の付着物が見られる。後者は、出土量が多く、本遺跡の主体となるもので、体部内面にはロクロ撫での凹凸が目立ち、特に底部内面と体部の境は沈線状に窪む。体部の立ち上がりは外方へ聞くものが一般的で、一部開きの少ないもの(106·112)がある。底部は回転ヘラ切り後、撫でにより体部との境を丸く仕上げるもの(111·112)が一般的で、そうでないもの(113)が一部含まれる。土器片

1) [鈴木 1983] の分類名称を使った。

2) 今池遺跡 [板井 1984] のI~III期、末野古窯跡群 [小島ほか 1983] のI·II期はともに8世紀代に比定されており、その資料の中に類例を認めることができる。

の内外面には、大小の黒色付着物¹⁾が目立つ。後者の土器は、本県に広く見られ9世紀後半以降に比定されよう。

甕 (142~144・146・147) 口縁部破片(142)は1点のみで他は胴部破片である。胴部の破片は内外面の叩き具・当て具により図示した4個体が出土している。143の表面は、平行線文の叩き具により、裏面は、同心円文の当て具痕が重複してみられる。144の表面は、平行線文を木目に直交させて施された叩き具を用いると考えられ、平行線文が一部重複する。裏面は平行線文の当て具による。146の表面は平行線文が荒く重複し、裏面は同心円文である。147の表面は粗い格子叩き目で、裏面は木目に直行した放射状文を当て具としている。

土師器 (114~141・148)

壺 (114~132) 底部破片の識別により30個体以上が出土しており、底部は全て回転糸切りである。121~123の立ち上がりが比較的急で器高の高いものと、114~116・118~120の器壁が厚く、体部は皿状に広がり器高が低いものに大別される。後者は、体部にロクロ撫での凹凸を顕著に残し、口縁端部で外反するもの(114・118~120)と内湾するもの(115・116)とがある。また118~120の内面に見られるタール状の付着物から燈明皿としての用途が考えられる。前者は、体部外面にロクロ痕の凹凸を残すが内面は比較的滑らかに仕上げられており、同形態と思われる底部破片132は、内面に丁寧なミガキが施される。また数は少ないが、底部の極端に小さな117、底部内面にロクロ痕の凹凸を明瞭に残す125・128・131、体部下半に対しヘラ削りにより段を細かく作り出す126・127があり、127は内外面に削りともミガキともつかぬ調整が施され、器面と断面が黒褐色を呈する。

有台皿 (133・134) 2点出土している。133は内面と体部にかけて丁寧なミガキが施され、器全体を黒色処理している。底部は回転糸切りで、付け高台は小さく外方へ張り出す。134は底部と高台内面を除き赤色塗彩されている。底部は残存しないが、付け高台の接合痕から回転糸切りであり、高台は大きく、133同様外方へ張り出す。

有台碗 (135) 細片であり細かな調整等は不明である。その他、高台の破片が3個体出土している。

甕は胴部破片の細片のみで図化していないが、小数出土している。表面は平行線文に直交する木目の見られる叩き目が、裏面は平行線文の当て具痕がみられる。

小型甕 (136) 1点のみの出土で、口縁端部は内側へ折り返され内面は沈線状に窪む。器面は全体に荒れているが、口縁内面には一様に蝶状の付着物がみられる。

非ロクロ成形甕 (137~141) 10個体以上が出土している。体部は直立気味に立ち上がる円筒状となるものが一般的である。外面の調整は口縁端部付近に施され、体部には縦位のハケ目が施される。内部は横位のハケ目によるものが一般的で、ハケ目で消しきれなかった粘土縫痕を部

1) 土器胎土に含まれる鉱物が溶解したものと考えられる。

分的に残す。

鍋 (148) 点数は少ない。148は体部破片で表面は平行叩き目が重複し、裏面は荒く、一部に粘土経痕を残す。

製塙土器は、胴部破片のため図化していないが、器厚が8mmと薄いものと、12mmの比較的厚いものの2個体が出土している。两者とも器形はバケツ状と考えられ、外面には粘土経痕が明瞭に残り、内面はヘラ撫でにより粘土経痕を消している。

中世の遺物

珠洲系陶器 (145・149) 2点のみの出土である。145は外面に平行叩き目が付く壺脇部片で、内面は指圧痕の後、不定方向にヘラ調整が観察される。149は、比較的太いおろし目をもつ鉢である。内外面は荒く、粘土経痕が明瞭に観察される。

第VI章 ま　　と　　め

1. 縄文時代後期初頭～前葉の土器群について

今回の調査では、鶴口下・美山両遺跡を合わせても縄文土器の出土はごく少量であった。しかし、後期初頭において、従来は注視されていなかった北陸地方の土器を確認することができた。これは県内の当該期の土器型式として設定されている三十稻場式土器との分布図や、時間的な関係を考える上で重要な視点となろう。そこで本項では、県内で断片的に報告されている当該期の北陸系土器を集め、各地方毎にそのあり方をとらえ、鶴口下遺跡出土土器の位置づけを行うこととする。

また、ここでいう北陸系土器とは、口縁部が外反し、頸部には横位の沈線・刺突列を有する岩崎野式¹⁾ [柳井 1976] と、口縁部下に波状の沈線や三角形刺突文を施す気屋式 [久保・高橋 1951] に類似する土器群である。しかし、両型式に共通した特徴とされる条が縱走するつぶの長い縄文¹⁾ を施すものは少量である。また口縁部形態や、基本的文様モチーフも若干異なることから北陸系土器と呼称する。

上越地方 親不知を越えればすぐ富山平野に至るという地理的な環境から、西頭城地方の海岸部に、北陸系土器の出土遺跡が集中している。中でも寺地遺跡は、破片資料ではあるが木柱群・組石造構・住居跡などの遺構から、岩崎野式・気屋式土器が検出されている。また三十稻場式土器は認められず、総的には少量ながらも北陸系土器によって占められている。その他には、長者ヶ原、苦竹原A、原山の各遺跡からも同様な北陸系土器が出土している。しかし遺

1) 【柳井 1976】の記載から引用したが、実測図・遺物写真を見た限りでは、前々段多条による縱走縄文と思われる。

跡の主体となる時期からはずれていたり、ごく少量の出土点数のため、三十稻場式土器との関連については言及できない。西頭城地方には当該期を主体とする遺跡の発掘例がなく、断定はできないが、おそらく北陸系の土器が大半を占め、三十稻場式土器は、客観的な存在でしかなかったと推定される。

山間部の遺跡では、兼俣・顯聖寺の両遺跡があげられる。前者は長野県境に位置し、中期後葉から後期前葉の時期に営まれた遺跡である。当該期では、三十稻場式土器を主体とするが、岩崎野式・気屋式も目立った存在となっている。後者は、中期初頭より晩期後葉にいたる各時期の遺物が出土している。中でも当該期は複雑な様相を呈している。三十稻場式を主体とし、称名寺式・気屋式が加わる。県内でも在地系土器に明確な形で関東系・北陸系土器が伴出する例は稀である。その他に長峰遺跡によても三十稻場式に混って気屋式が確認されている。

以上上越地方を大きく西頭城と中・東頭城に大別すると西頭城は北陸系土器が主体をなし、中・東頭城では、三十稻場式を主体に若干の関東系・北陸系の土器が混入するという状況になろう。

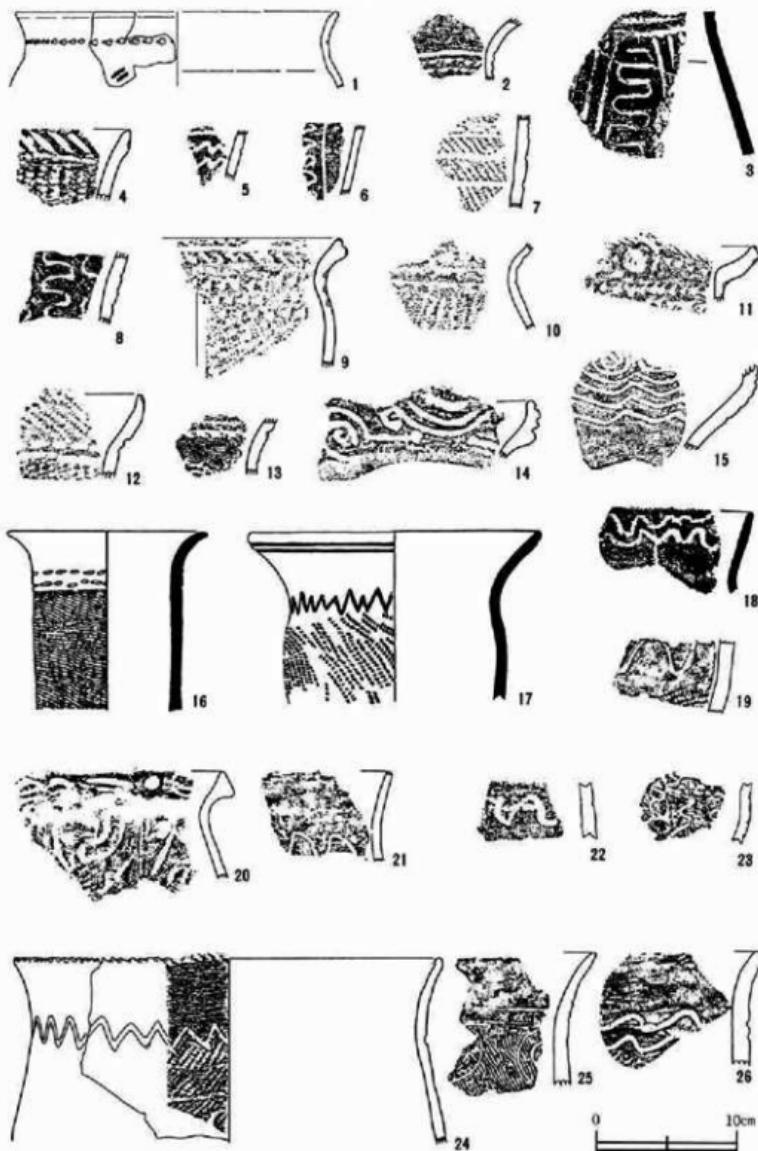
佐渡地方 佐渡は中期後半において、藤塚式¹⁾という独特な土器様式を生み出したが、後期に至ると三十稻場式が主体を占めるようになる。しかし、客観的ではあるが、第11図で示した五遺跡で北陸系の土器が出土している。中でも垣ノ内、長者ヶ平遺跡では気屋式が認められ、離島にありながらも北陸との直接的な交流が認められる。また特記すべきは、粗製土器に貝殻条痕文を施した土器群の存在である。当該期の越後や北陸地方では認められない技法であり、西日本から直接的な影響を受けたのだろうか。本旨からはずれることから詳解は避けるが、精製



第11図 新潟県内における北陸系土器出土遺跡

1) [池田 1985] によれば、藤塚式は4つの型式別の変遷によってとらえられ、中期の後半～末葉に位置づけられている。しかし第3型列の第2群は、沈線・刻突などの施文に北陸系土器との関連性が認められる。後期にも下る土器の存在が示唆される。

2) [本間はか 1981] の中で、貝殻条痕文土器の系譜を「椎名仙草氏は西日本にあるとし、中川成夫氏は山陰地方にあると指摘したが、尚今後の研究にまたなければならない」と記している。しかしそ後の研究は進展していない。



第12図 新潟県内出土の北陸系土器

土器の中でも中津式に類似した土器が存在しており、その伝播経路は今後の課題となろう。

中越地方 中越地方は、三十稻場式の主要な分布地域であり、北陸地方色は一層薄らいでいる。特に信濃川流域でその傾向が顕著であり、城之腰遺跡¹⁾や反里口遺跡に認められる程度である。後者は長野県境に近い信濃川支流の段丘上にあり、条件的には兼俣遺跡に類似する。出土遺物も称名寺式土器を含み、同様な傾向をみせている。

その他には、海岸部の剣野D、矢郷橋遺跡で気屋式が検出されているが、現段階で管見に触れた限りでは、反里口遺跡を除いて信濃以東には出土していない。

鰐口下遺跡出土の土器（図版7、11） おそらく県内で岩崎野式と認定でき、ほぼ全体の器形を知り得るもののが初例と思われる。岩崎野式は富山県立山町岩崎野遺跡〔梅井 1976〕において、従来の前田式〔小島 1964〕と突線文系土器が一括出土することから、新たに設定された型式である。鰐口下遺跡出土の土器は、浅くて幅広な沈線、雨滴状の列点、前々段多条の継走繩文を特徴としている。これは従来の前田式と呼ばれる土器と特徴が一致するが、本報告書では地理的な条件から、越中で使用されている岩崎野式として理解した。

また、時間的な位置づけは北陸において、串田新II式（中期後業）と氣屋式（後期前業）との間に置かれている点では共通した認識がなされている。しかし、その間を中期末とするか、中期末～後期初頭と幅を持たせるか、後期初頭とするか三者三様である。ここでは、三十稻場式や、称名寺式、中津式に併行すると考えて後期初頭に位置づけた。

串田新II式を母体として成立した岩崎野式は、その勢力を越後地方にものぼそうとするが、三十稻場式の強い勢力に阻まれて中越地方にまではなかなか達することが出来なかつたと考えられる。氣屋式に至っても断片的な出土は各地でみられるが、客体的な存在でしかなく基本的な状況に変化は見られない。

また佐渡における後期初頭～前業の土器のあり方は特異である。三十稻場式が主体となり、北陸系の土器が客体的に存在する状況に差異はない。しかし、土器総体として三十稻場式と認められても、その文様要素・施文技法に北陸的な色あいが看取され、貝殻条痕文土器の存在と合わせて今後の課題となろう。

〔図版に使用した遺跡・文献〕

- 1・7：原山〔寺崎・川村ほか 1988〕、2・4～6・8・9・11～15：寺地〔寺崎・岡・石川ほか 1987〕、3：長者ヶ原〔藤田・清水 1964〕、10：苦竹原V〔大森ほか 1983〕、16：兼俣〔室岡・本間 1976〕、17・18：顯聖寺〔中川・岡本ほか 1959〕、19～21：反里口〔大沢・島田 1977〕、22～23：垣ノ内〔本間ほか 1981〕、24：剣野D〔岡本 1987〕、25・26：矢郷橋〔岡本 1976〕

1) 城之腰遺跡は、小千谷市大字山谷字城之腰に所在し、昭和53年から四ヵ年にわたって発掘調査がなされた。現在整理作業中である。

2) [岸本・酒井 1982] では中期末に、[梅井 1976] では中期末～後期初頭、[高堀・加藤ほか 1986] は後期初頭に位置づけている。

2. 平安時代の遺構・遺物について

溝状遺構について

遺構の節でも述べたように、鰐口下遺跡を特徴づけているのは調査区を縦横に走る多くの溝であり、ここではこれらの溝の性格について若干ふれてみたい。

溝の一般的な利用法としては、流水溝や土地区画溝が考えられる。流水溝は給・排水を目的とし、流水を助けるための傾斜を必要とする。また土地区画のための溝は、その区画の対象となつた住居跡あるいは集落跡を伴うのが普通である。今回の調査で検出された溝状遺溝は、台地上で5基、沢部で2基の計7基であるが、まず台地上の遺構から検討を加えていきたい。

図版1を見てわかるとおり、それぞれの溝がかなり奔放な方向に延びているといえる。特に1号と2号、2号と3号のように垂直に近い角度で接しているものもあり、区画溝としての可能性を考えた場合には注目すべき点がある。しかし、区画を必要とするほど大規模な住居跡や集落跡が検出されていないことや、溝の時期的な意味からも土地区画溝と考えるには無理があるようと思われる。むしろ地形的な観点からすれば、個々の溝がそれぞれ一定の傾斜を得るように掘り込まれており、流水溝と考えた方が自然であろう。ただ、これらの溝が給水・排水のいずれの機能を担っていたかについては必ずしも明確でない。給水を目的とすれば供給源を必要とするわけだが、2号溝の南端は途中で途切れしており不明である。また当遺跡のすぐ北側に位置する『道者ハバ遺跡』古代の当地域の中心集落とされる)の給水源を近くの湧水地(現在の二郎太郎池)に求める説[青木 1976]もあり、事実とすれば給水を目的とした大規模な施設の必要性は少なかったものと考えられる。一方、沢部の溝の性格はさらに難解である。沢筋にはば沿って掘り込まれている9号溝はともかくも、8号溝にいたってはこれを横断するような方向に掘り込まれ、その性格は不明と言わざるを得ない。あえて推測するならば、降水により沢部に集中する多量な水の氾濫を防ぐ、なんらかの防災施設の可能性が挙げられよう。

以上のように、溝の性格について可能な範囲で推測を試みてきたが、他の遺跡の例と単純に比較可能な資料とは言えず明確な結論を得られなかった。類例の増加にまちたいと考える。

平安時代の土器について

鰐口下遺跡と美山遺跡とでは、出土した土器から時期的な差が見受けられる。鰐口下遺跡の2号住居59、9号溝73の須恵器杯は9世紀後半~10世紀にかけての佐渡小泊窯跡群の所産と考えられ[坂井 1987]。それぞれに共伴する土師器杯や非ロクロ成形壺の形態・製作技術においても共通性がみられる。また、1号住居ピット114出土の土師器杯68には底部内外面にヘラ記号が付き、これは2号住居55にも見られ、それぞれの形態・技法等も酷似している。このように、鰐口下遺跡出土の土器は、時期的に近い関係にあると考えられ、それらを出土する遺構も同様と考えられ須恵器杯から前述した9世紀後半~10世紀にかけての所産と位置付けておく。

美山遺跡の調査範囲は地形的に沢部にあたり、遺構も検出されないことから、多時期の遺物

が混在して出土している。しかし、平安時代の主体は、器壁の薄い須恵器無台坏(105~113)と器高が低く器壁が厚い土師器坏(114~120)，それに有台皿(133・134)であろう。須恵器坏は、鰐口下遺跡のものに比べ、若干小ぶりである他は成形技術・胎土共に酷似しており、9世紀後半以降と考えられる。土師器坏・有台皿は現在のところ対比資料が周辺地域には存在せず、石川県漆町遺跡【田嶋 1986】によれば、およそ10世紀代に比定されよう。

最後に両遺跡から多量に出土した非ロクロ成形壺について若干触れてみたい。非ロクロ成形壺は須沢角地 A 遺跡【土田ほか 1988】によれば8世紀から9世紀代まで認められ、形態もバラエティーに富む。そして、9世紀に入るとロクロ成形のものへ転換し始める。その後、寸胴で鉢形のものが残り、大型で口縁部と胴部の境が明瞭に屈曲するものは消去する。本遺跡においても、大半が寸胴鉢形のもので占められ時期的にも新しい所産と考えられる。次に用途であるが、本遺跡出土の大半が底部付近に二次焼成によると考えられる変色、器面の剥落等が観察され、煮沸に用いたと推測される。また、同様の観察は須沢角地 A 遺跡・小出越遺跡等でもおこなわれており、煮沸用と考えられる。

3. 結語

ここでは調査成果について、遺跡別・時代別に要約する。

鰐口下遺跡

縄文時代……遺構は検出されていないが、中期末葉から晩期末葉にわたる土器が出土している。特に北陸系の岩崎野式土器は、現在のところ県内で数少ない資料である。石器は、石鎚・石匙・石斧など各種の石器が出土している。

平安時代……住居跡・溝状遺構・土坑等が検出されたが、中でも溝状遺構の配置は、一見規則性がみられる。しかし、用途等については不明である。遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器が出土しており、いずれも9世紀後半から10世紀代に位置付けられる。

美山遺跡

縄文時代……遺構は検出されていないが、中期末葉から後期初頭にわたる土器が出土している。石器は石鎚・石鍤等が出土している。

平安時代……遺構は検出されていないが、8世紀から10世紀にかけての土師器・須恵器が出土している。

1) 小出越遺跡【遠藤 1988 b】の4号住居跡出土のものに、口縁部と胴部が明瞭に区別できる大型の壺・鉢が存在し、時期的には9世紀中葉に比定される。

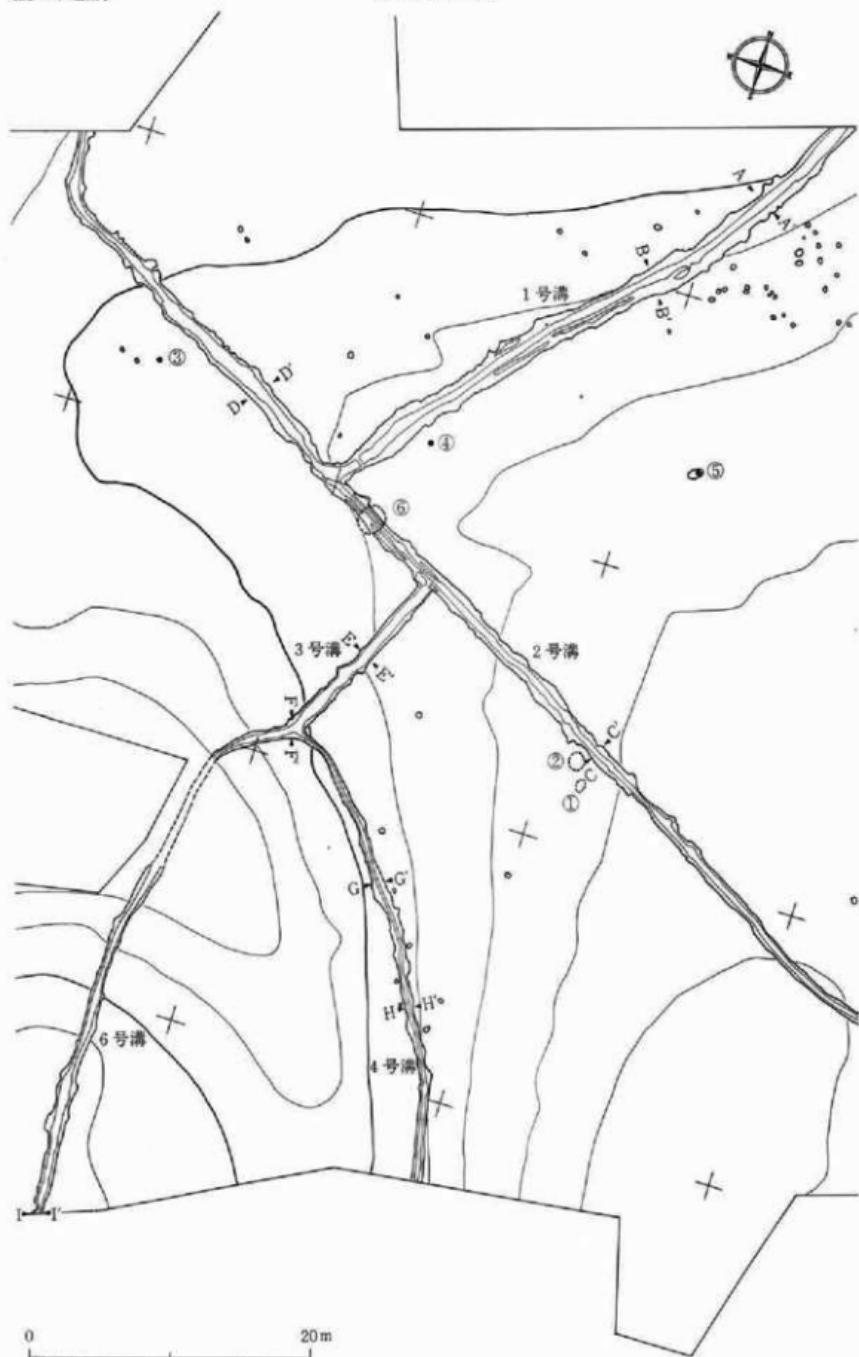
引用文献

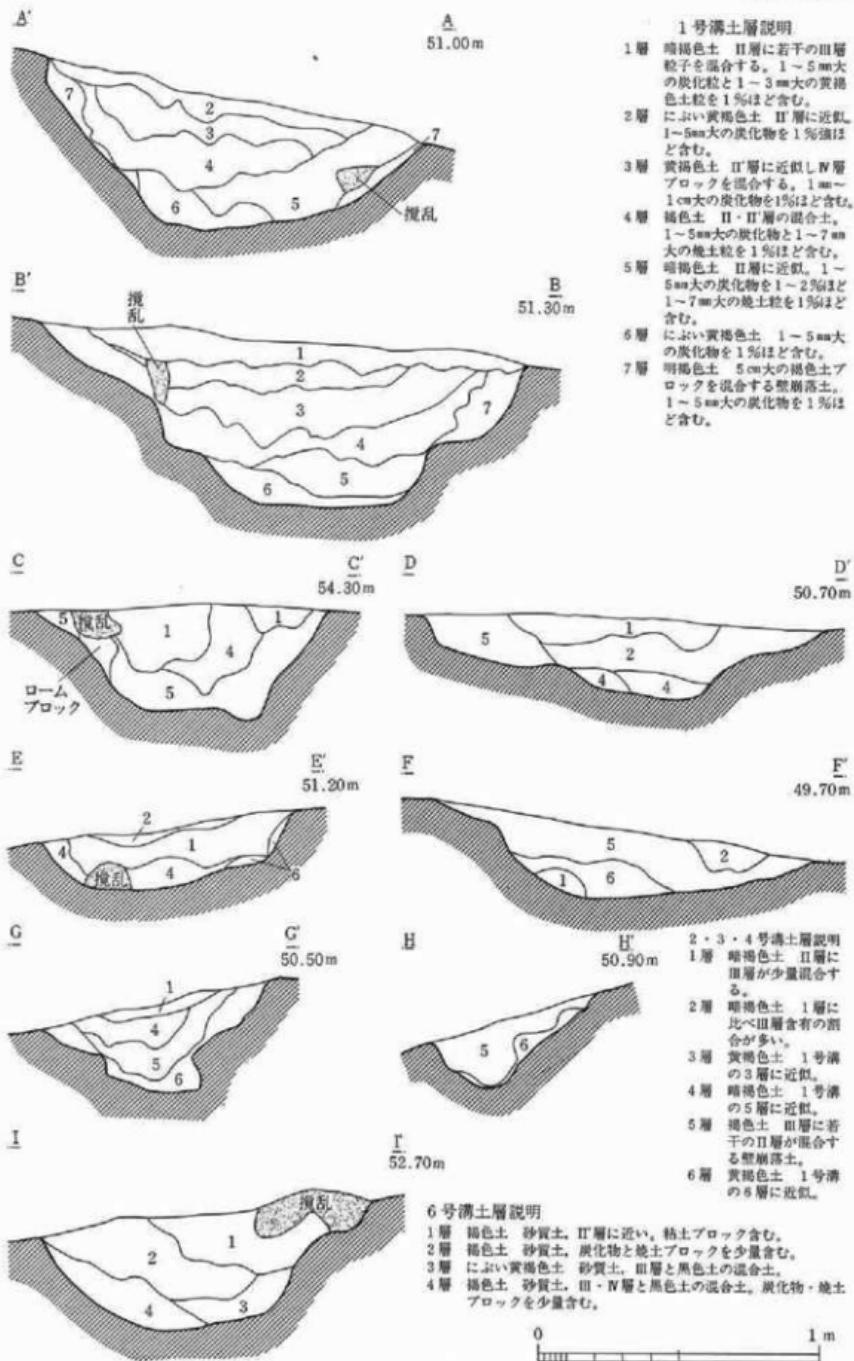
- 青木重孝 1976 「第6編 上世の構造」『糸魚川市史1』 糸魚川市役所
- 池田晃一 1985 「藤原式土器様式の研究—とくに佐渡長者ヶ平遺跡出土の土器を中心として」『国学院大学考古学資料館紀要』第1輯 国学院大学考古学資料研究室
- 石沢寅二・島田靖久 1977 「反里口遺跡発掘調査報告書」津南町教育委員会
- 磯崎正彦・上原甲子郎 1969 「亀ヶ岡式外殻圓における終末期の土器形式」『石器時代』9号 石器時代研究会
- 遠藤孝司 1988a 「第Ⅱ章4 遺跡の層序」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第51集 小出越遺跡』 新潟県教育委員会
- 遠藤孝司 1988b 「第Ⅲ章2 4号住居」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第51集 小出越遺跡』 新潟県教育委員会
- 大森 勉 1983 「苦竹原V遺跡」『遺跡範囲確認調査報告書』糸魚川市教育委員会
- 岡本郁栄 1976 「矢野橋遺跡出土の土器群」『柏崎・刈羽』第4号 柏崎刈羽郷土研究会
- 岡本郁栄 1987 「側野D遺跡」『柏崎市資料集 考古篇1』 柏崎市史編さん委員会
- 岸本雅敏・酒井洋洋 1982 「東中江遺跡」 平村教育委員会
- 久保 清・高麗勝喜 1951 「河北郡宇ノ氣町氣屋遺跡」『石川考古学研究会誌』第3号 石川考古学研究会
- 小島俊彰 1964 「高岡公園小竹戻縄文遺跡」 高岡市教育委員会
- 小島幸雄・秦繁治・水沢省吾 1983 「末野古窯跡群」『新潟県文化財調査年報第22』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1984 「第Ⅳ章1 今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35 今池・下新町・子安遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1987 「第Ⅴ章 まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集 番場遺跡』 新潟県教育委員会
- 鈴木郁夫 1983 「I 地形分類図」『新潟県上越地域土地分類基本調査—糸魚川』 新潟県農地部農村総合整備課
- 鈴木道之助 1983 「石塚」『縄文文化の研究』7 雄山閣
- 高橋 保 1986 「第Ⅲ章C 層序」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第45 中原・岩野A・岩野E遺跡』 新潟県教育委員会
- 高麗勝喜・加藤三千雄ほか 1986 「真脇遺跡」 能都町教育委員会・真脇道路発掘調査団
- 田嶋明人 1987 「第Ⅳ章2 9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」『猿町遺跡1』 石川県立埋蔵文化財センター
- 田中 靖 1988a 「第Ⅲ章 層序」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 原山・大塚遺跡』 新潟県教育委員会
- 田中 靖 1988b 「第Ⅴ章4 遺物」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 原山・大塚遺跡』 新潟県教育委員会
- 土田孝雄ほか 1988 「須沢角地A遺跡」 青海町教育委員会
- 寺崎裕助 1988 「第Ⅳ章1 グリッドの設定と調査の方法」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 原山・大塚遺跡』 新潟県教育委員会

- 寺崎祐助・川村浩司 1968 「第Ⅱ章 4 その他の遺物」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 原山・大塚遺跡』 新潟県教育委員会
- 寺村光晴・間 雅之・石川日出志ほか 1987 「史跡 寺地遺跡」 新潟県青海町
- 中川成夫・岡本 勇ほか 1959 「頭聖寺遺跡」 浦川原村教育委員会
- 藤田亮策・清水潤三 1964 「長者ヶ原」 糸魚川市教育委員会
- 本間嘉靖ほか 1981 「垣ノ内遺跡」 新穂村教育委員会・佐渡考古歴史学会
- 室岡 博・本間信昭 1976 「兼保遺跡」 炙高高原町教育委員会
- 柳井 眇 1976 「富山県立山町岩崎野遺跡緊急発掘調査概報」 富山県教育委員会

図 版

- | | |
|-----|---------|
| 遺 構 | 1 ~ 6 |
| 遺 物 | 7 ~ 15 |
| 写 真 | 16 ~ 39 |

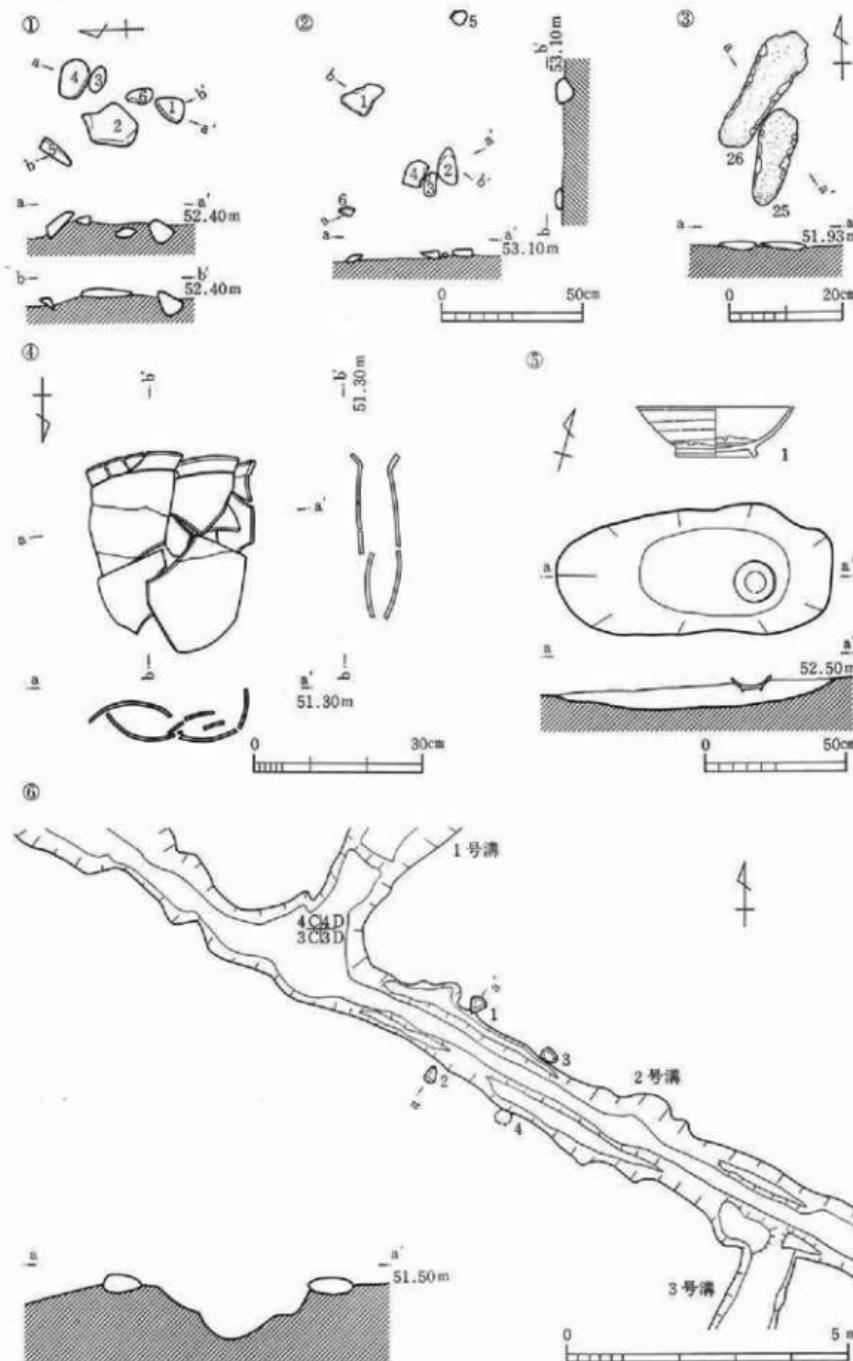


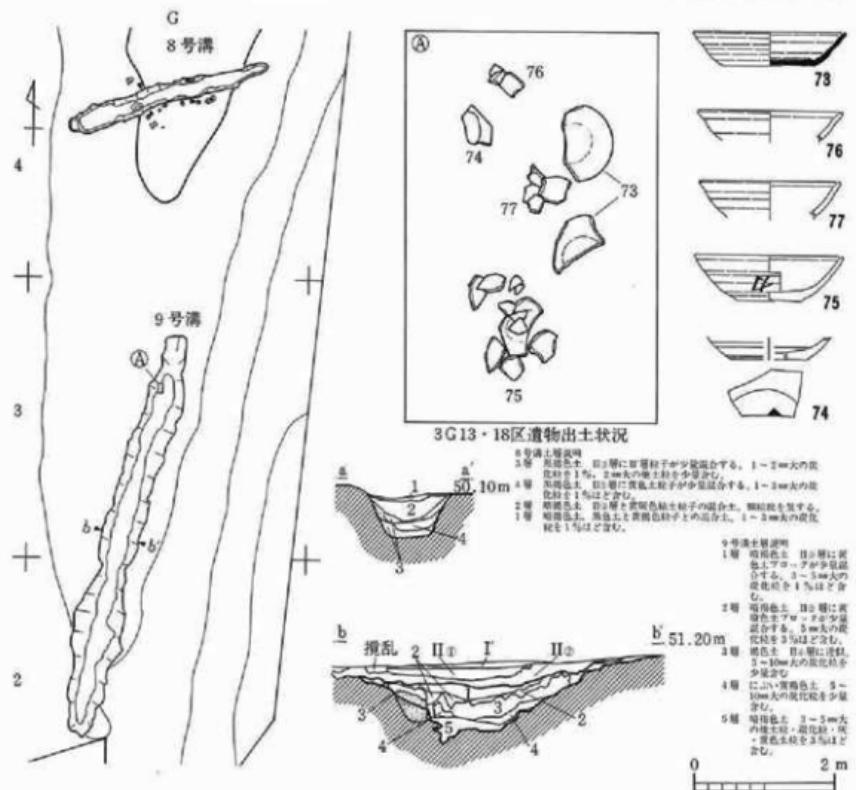
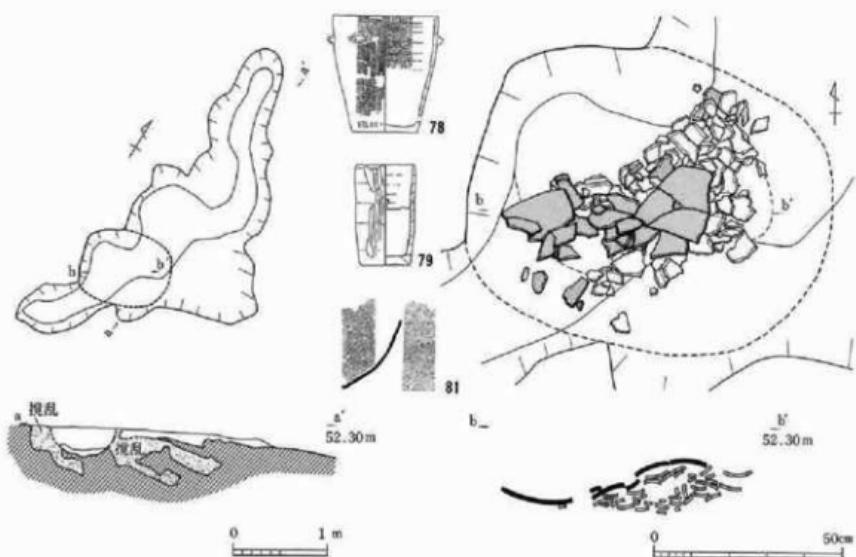


0 1 m

図版3
(鉢口下遺跡)

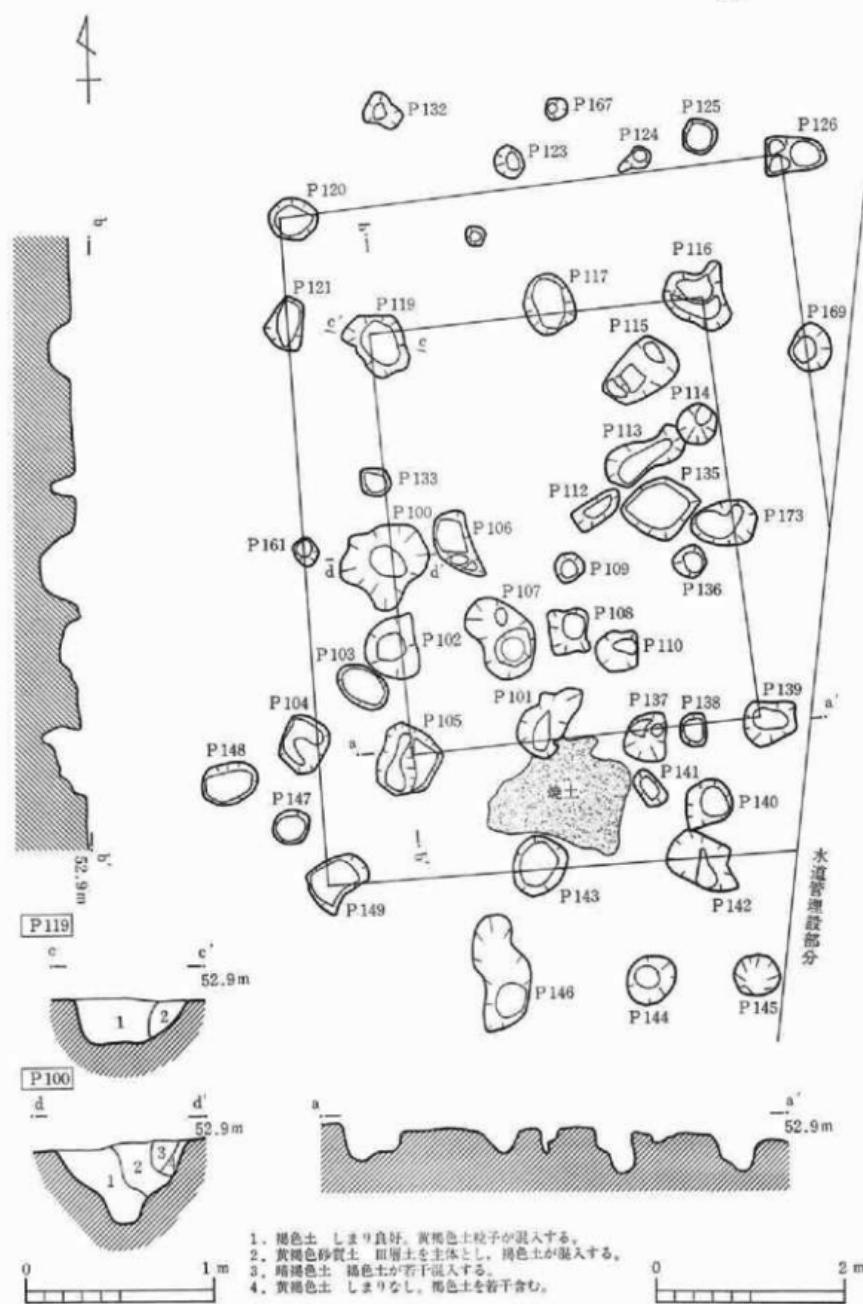
その他の遺構



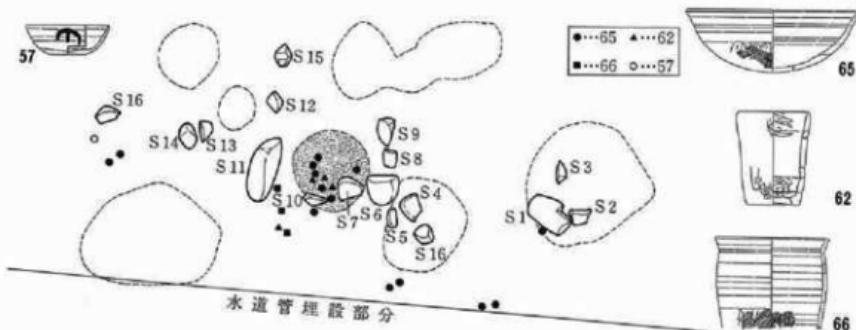


P130

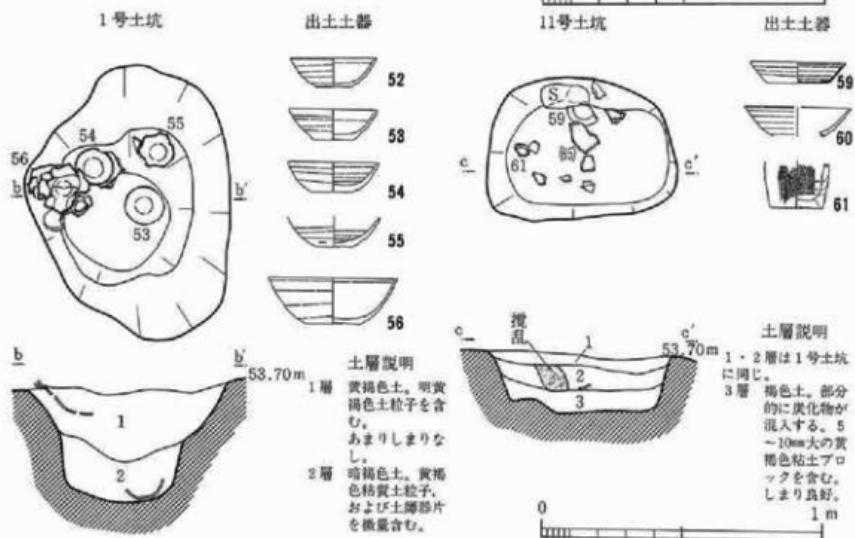
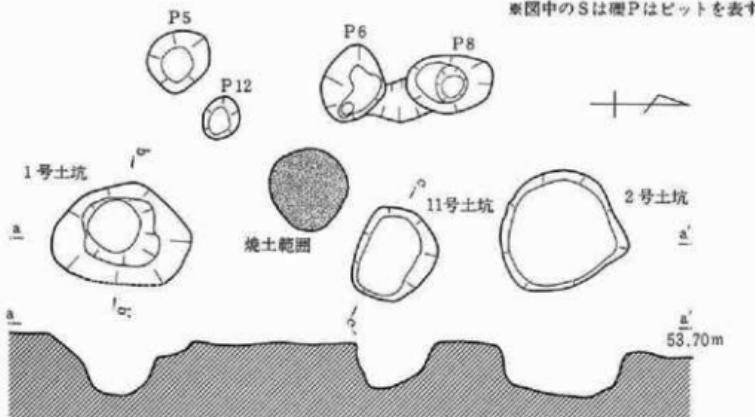
P170

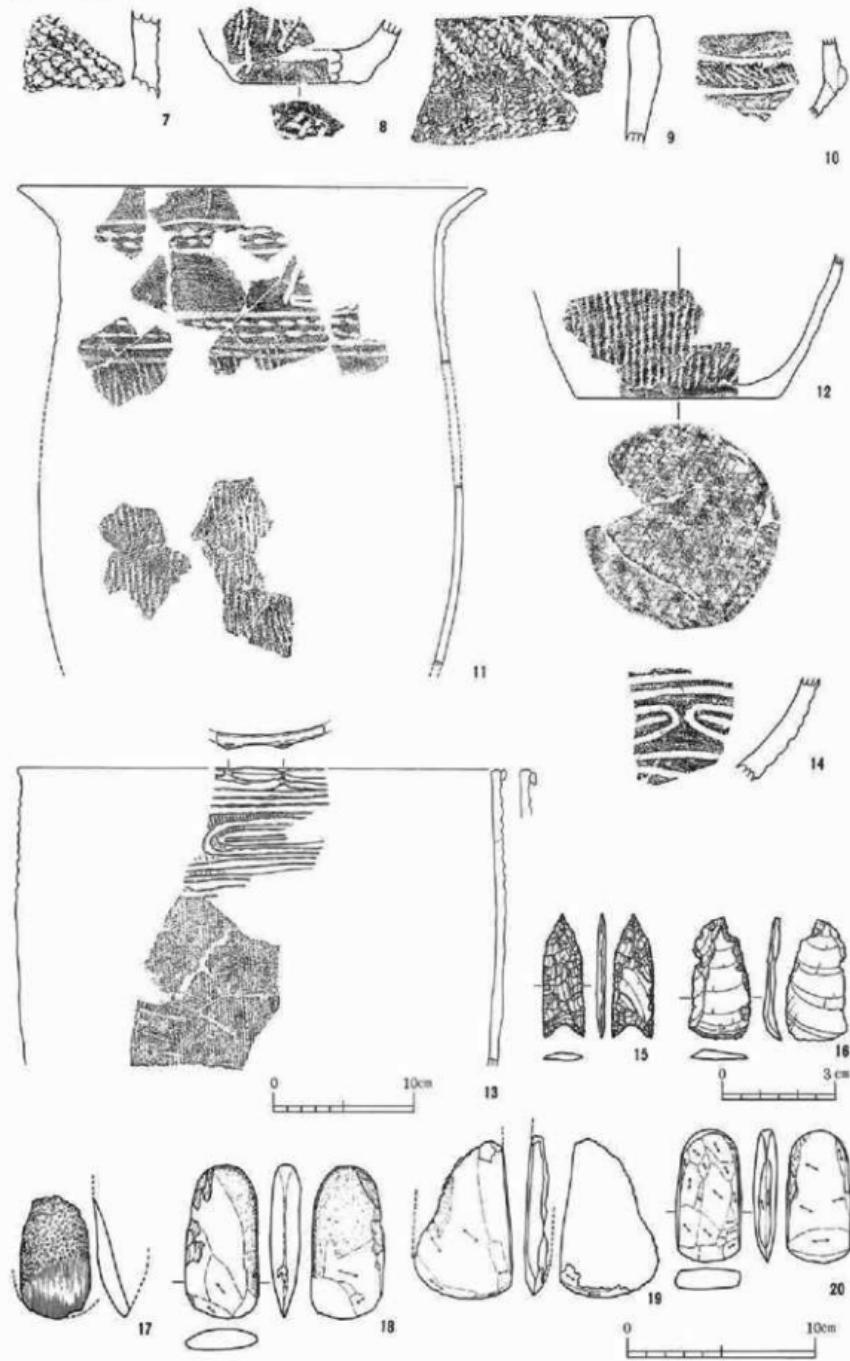


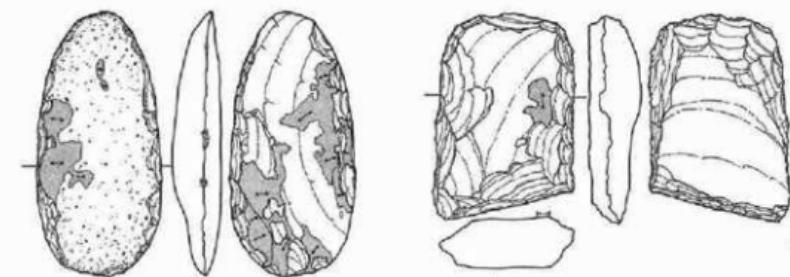
2号住居跡

図版6
(鶴口下遺跡)

東図中のSは櫛Pはピットを表す

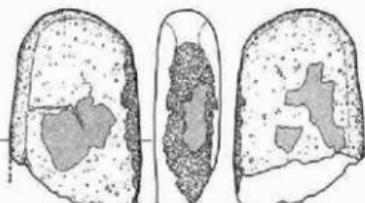




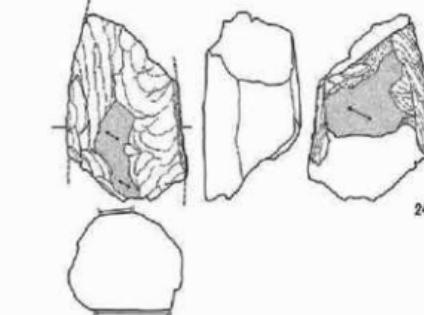


22

21

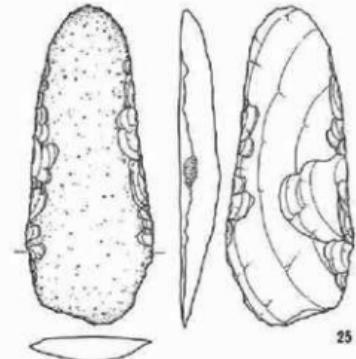


23

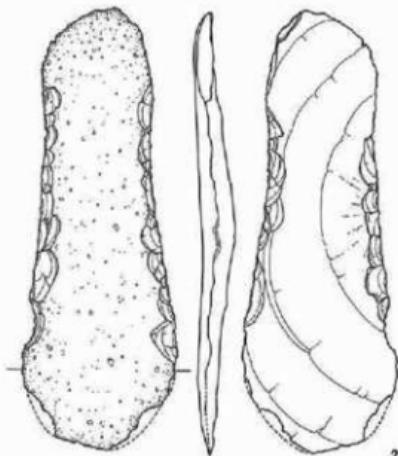


24

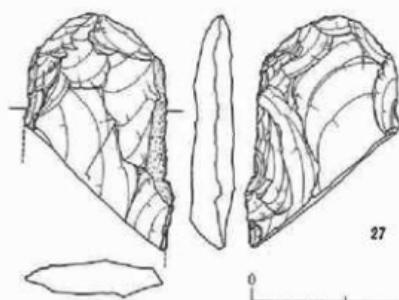
■ 壓面



25



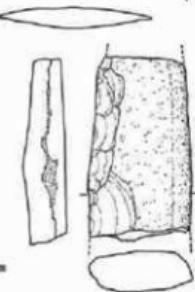
26



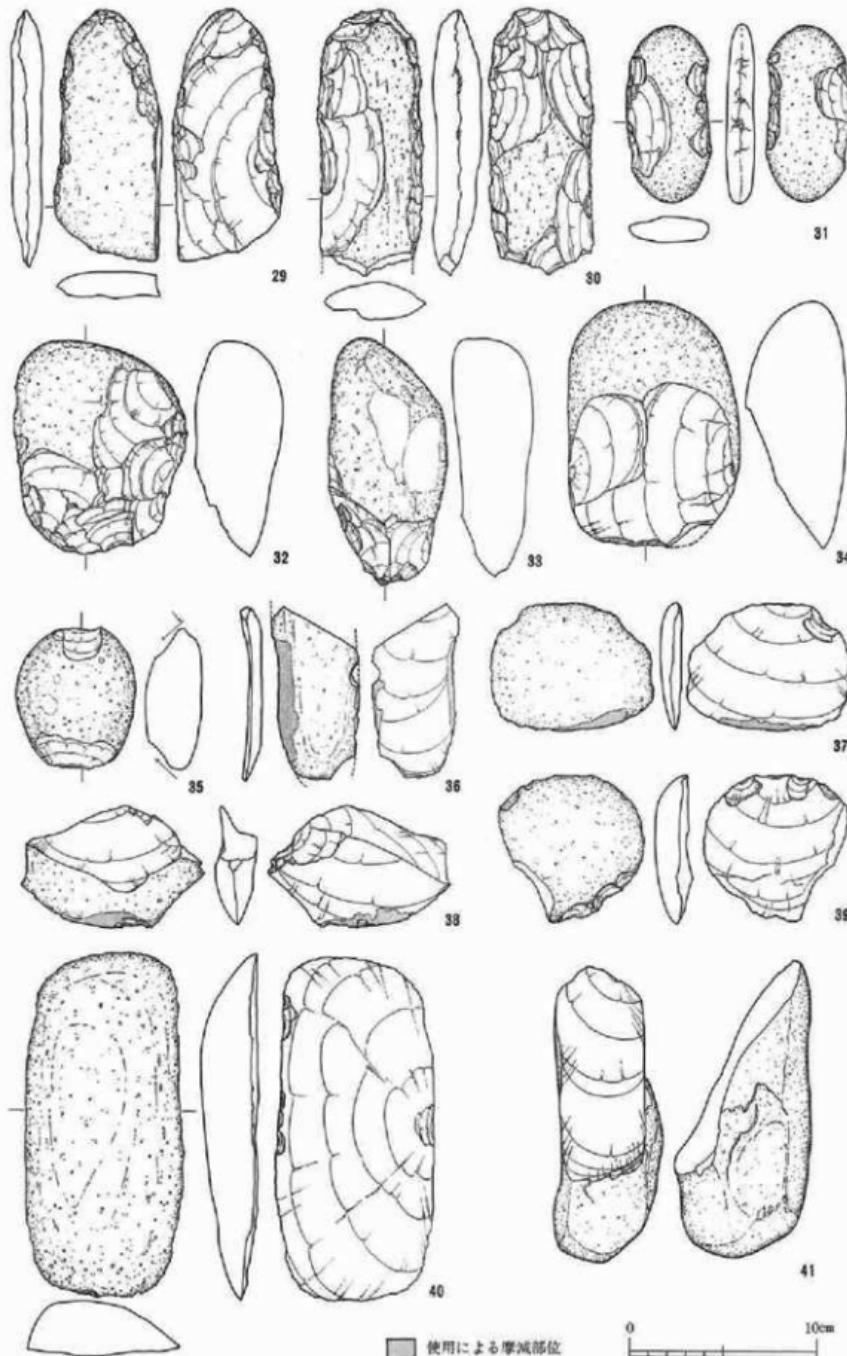
27

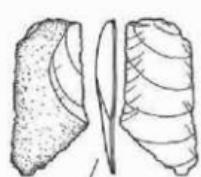
0

10cm

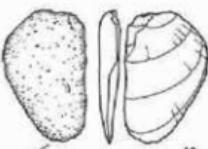


28





42b



42a



43



44



45



42



42



46

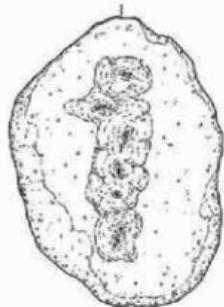


42c

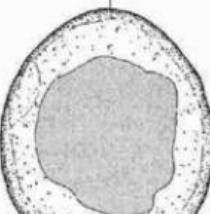
42c



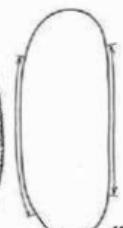
42c



47



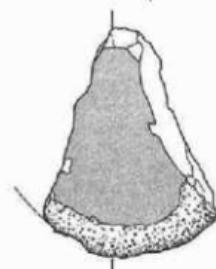
48



49



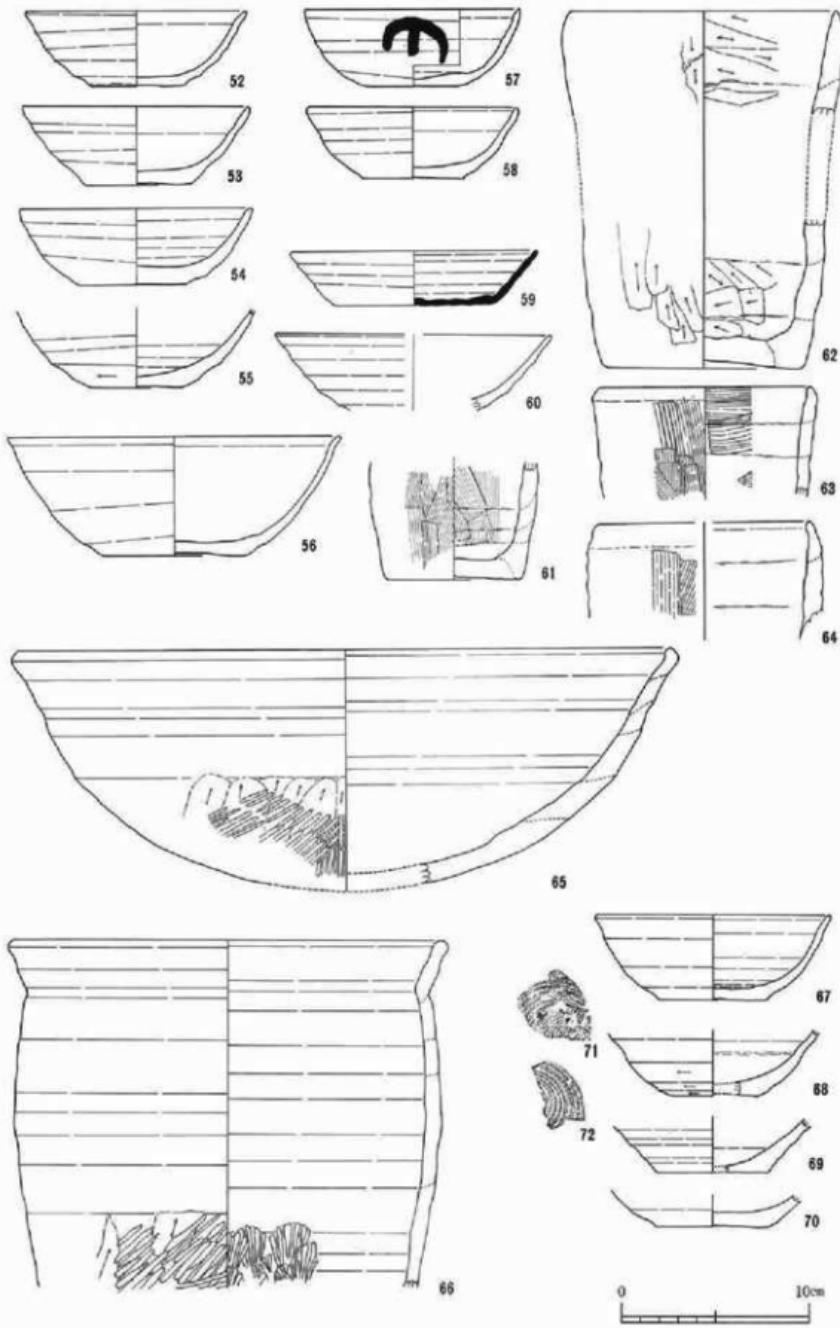
50

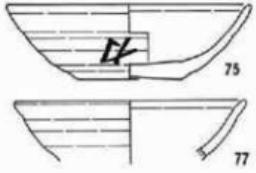
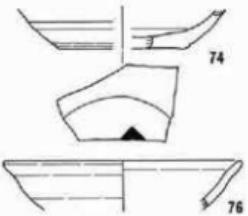
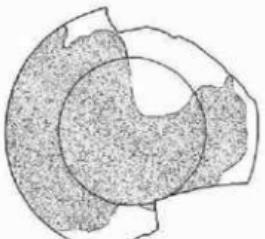


51

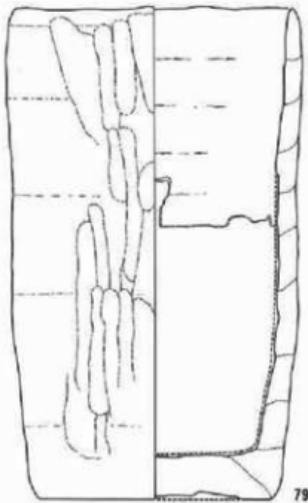
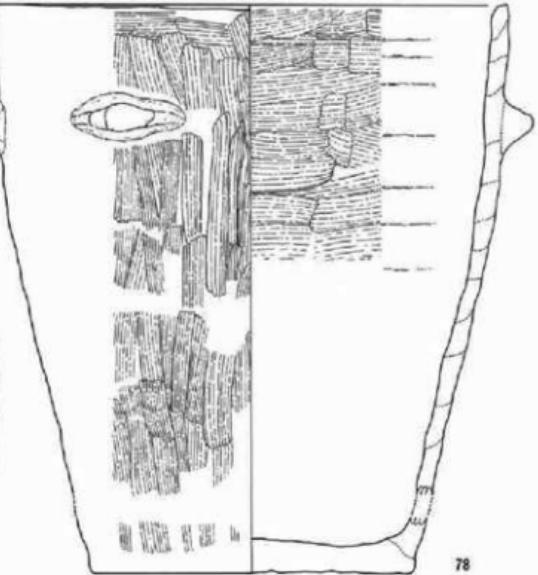
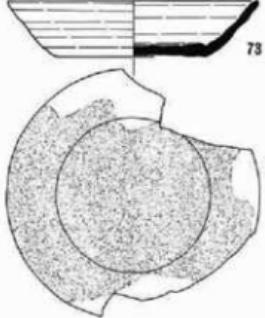
■ 背面

0 10cm





■ タール状黒色付着物



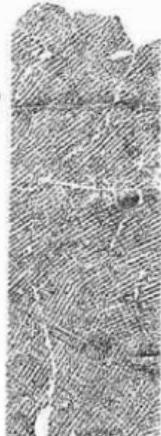
0 10cm

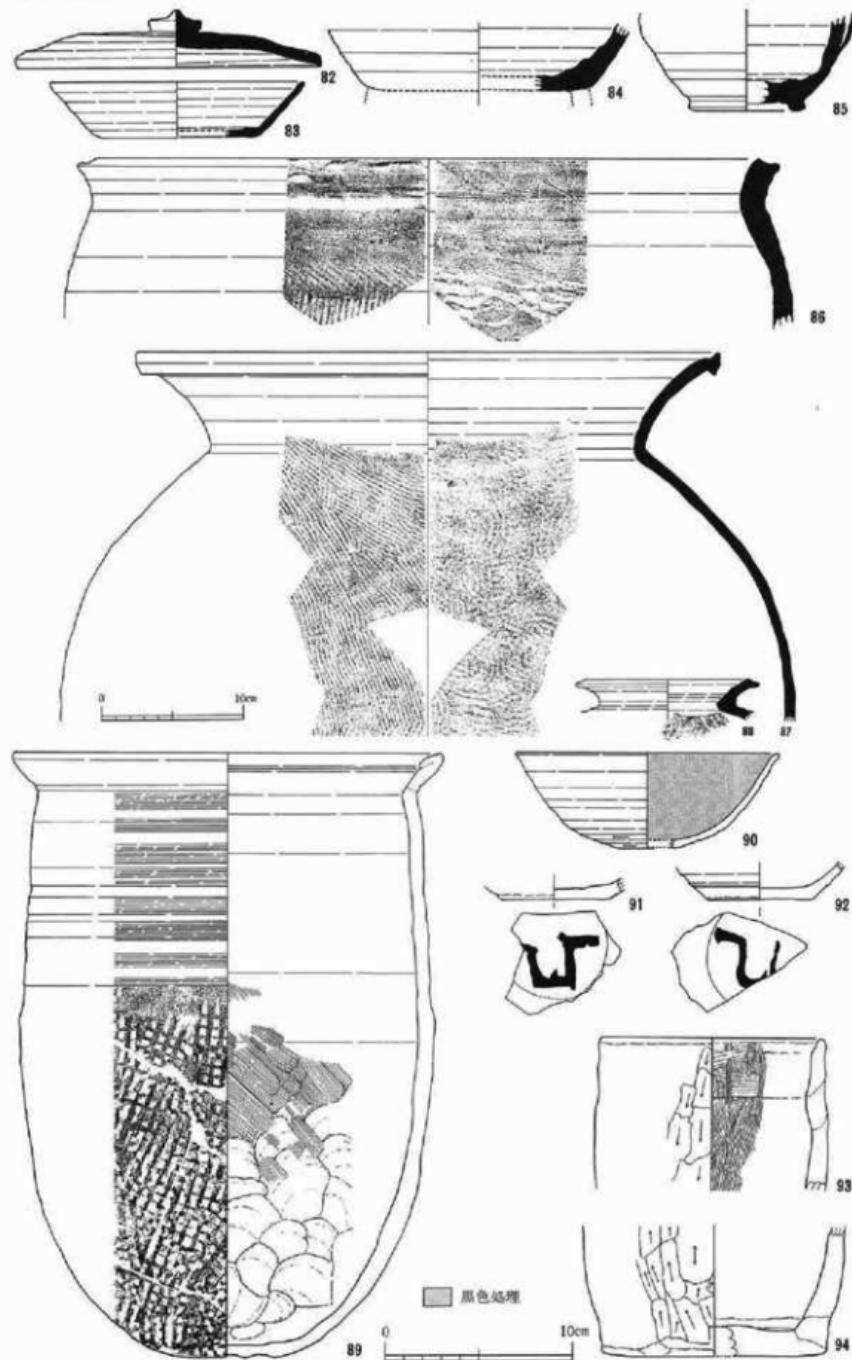


80



0 10cm



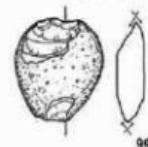




95



98



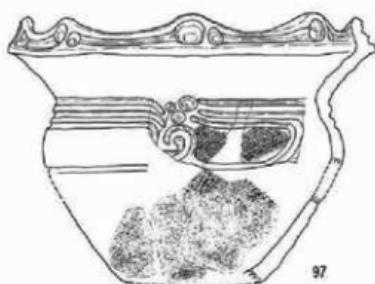
99



96



100



97



101



102



103



104



111



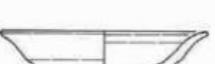
105



112



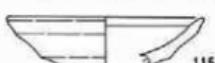
106



113



107



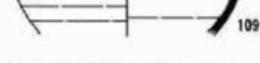
114



108



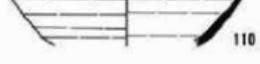
115



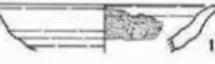
109



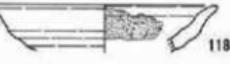
116



110



117



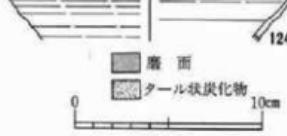
118

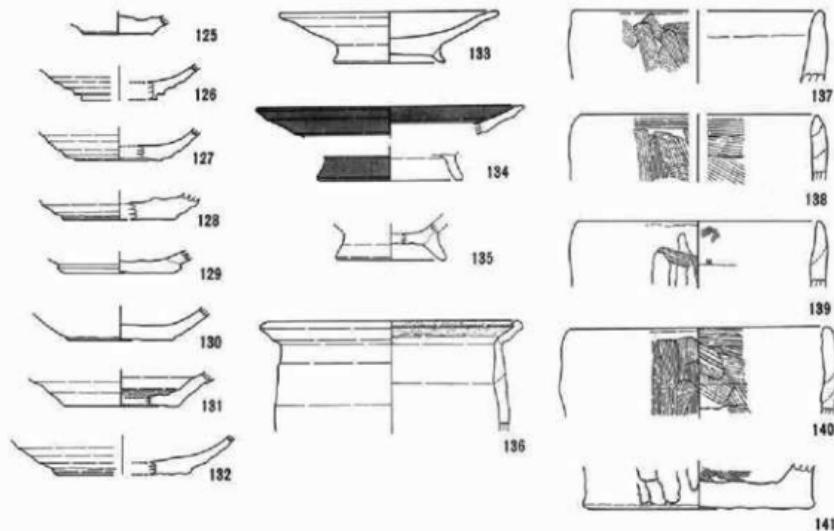
■ 壁面

■ タール状炭化物

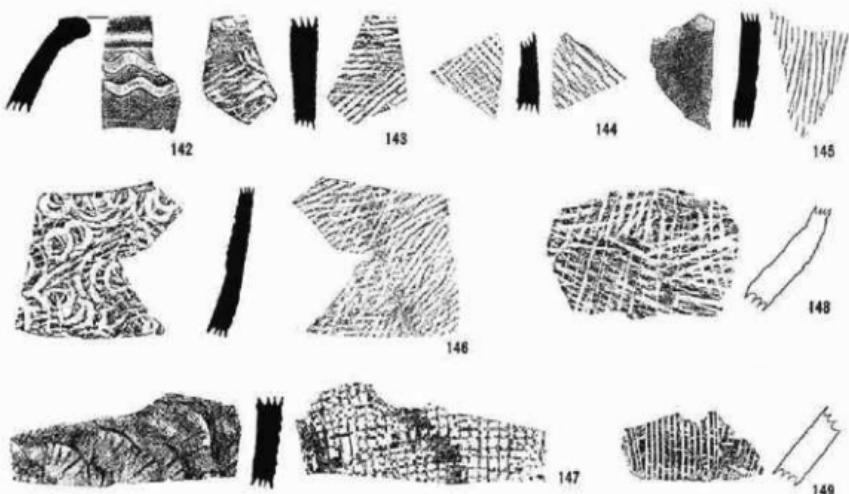
0

10cm





■ 赤色塗彩
■ 様状炭化物
138 内外面黒色処理



0 10cm





1. 遺跡近景
(調査前)



2. 遺跡近景
(調査中)



3. 遺跡層序



1. 調査風景
(2・30区)

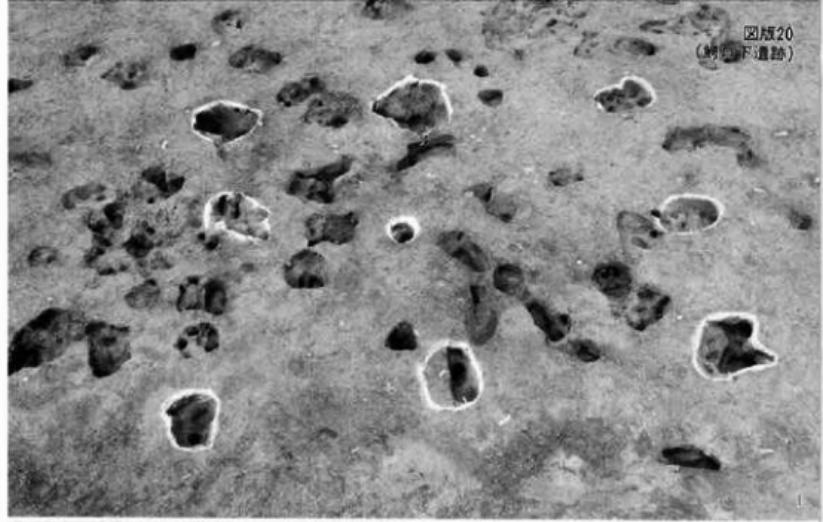


2. 調査風景
(2~5G区)

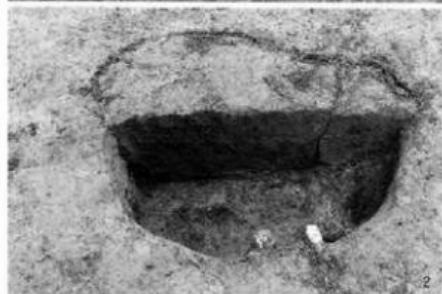


3. 調査風景
(2~5G区)





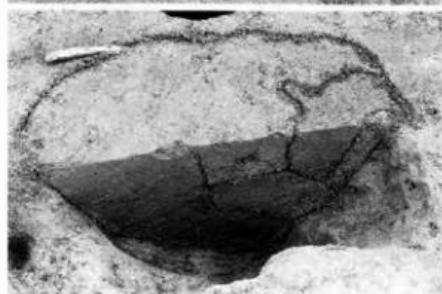
1. 1号住居跡
完掘状態



2. 1号住居跡
ピット119
土層断面



3. 1号住居跡
ピット139
土層断面



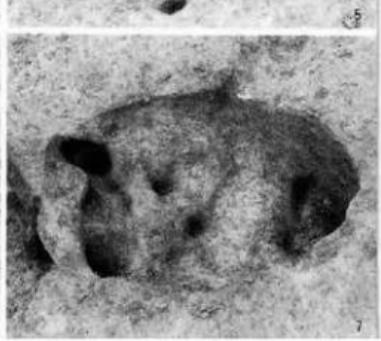
4. 1号住居跡
ピット139
土層断面



5. 1号住居跡
ピット116
完掘状態



6. 1号住居跡
ピット105
土層断面



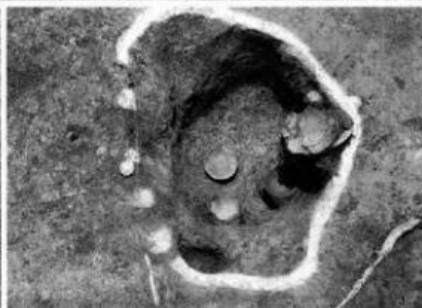
7. 1号住居跡
ピット117
完掘状態



1. 2号住居跡
遺物出土状態



2. 2号住居跡
完掘状態



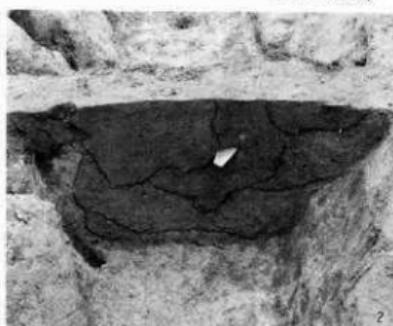
3. 2号住居跡
1号土坑土層断面

4. 2号住居跡
1号土坑遺物出土
状態

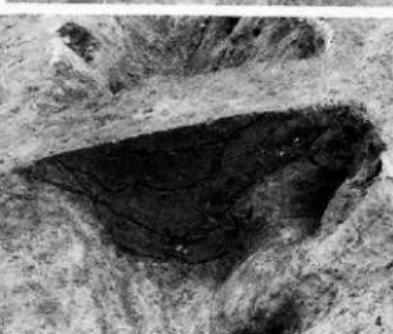
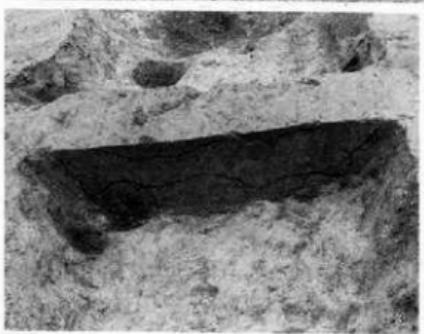




1. 1號溝狀遺構
土層斷面



2. 2號溝狀遺構
土層斷面



3. 3號溝狀遺構
土層斷面



4. 4號溝狀遺構
土層斷面



5. 6號溝狀遺構
土層斷面



6. 8號溝狀遺構
土層斷面



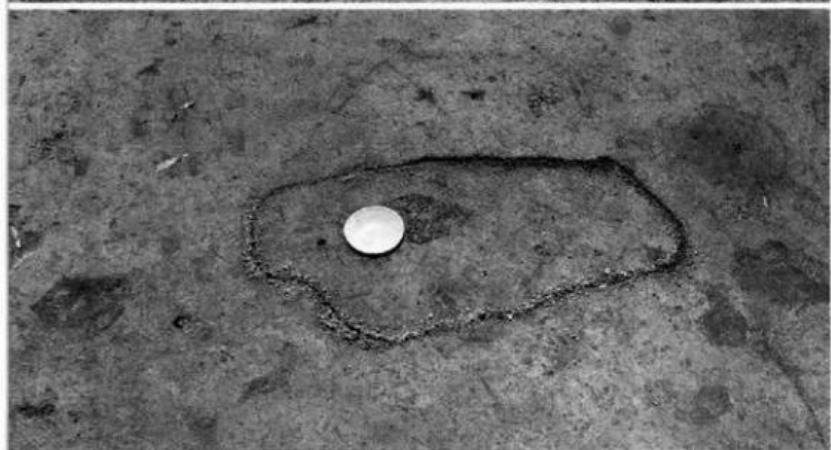
7. 9號溝狀遺構
土層斷面



8. 9號溝狀遺構
土器出土狀態



1. 土器器塞出土状态



2. 灰胎陶器出土状态



3. 4号土坑土器
出土状态



1. 遺跡近景



2. 遺跡層序



3. 調査風景



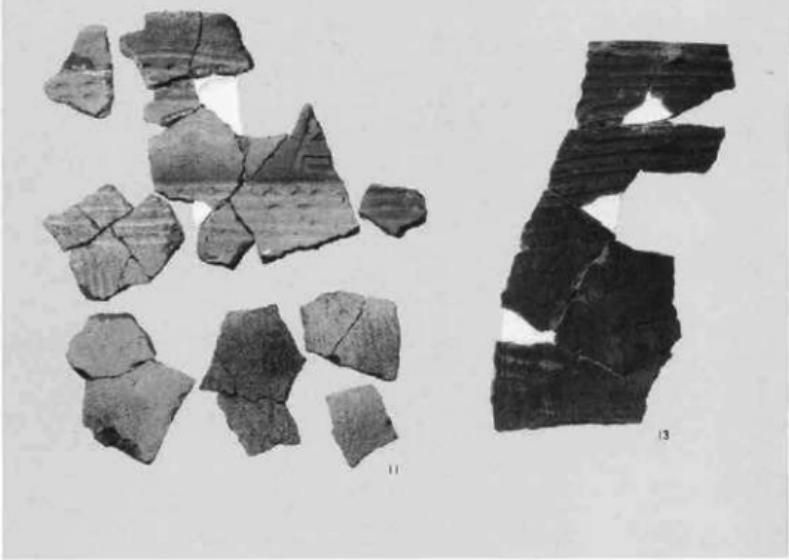
1. 調査風景



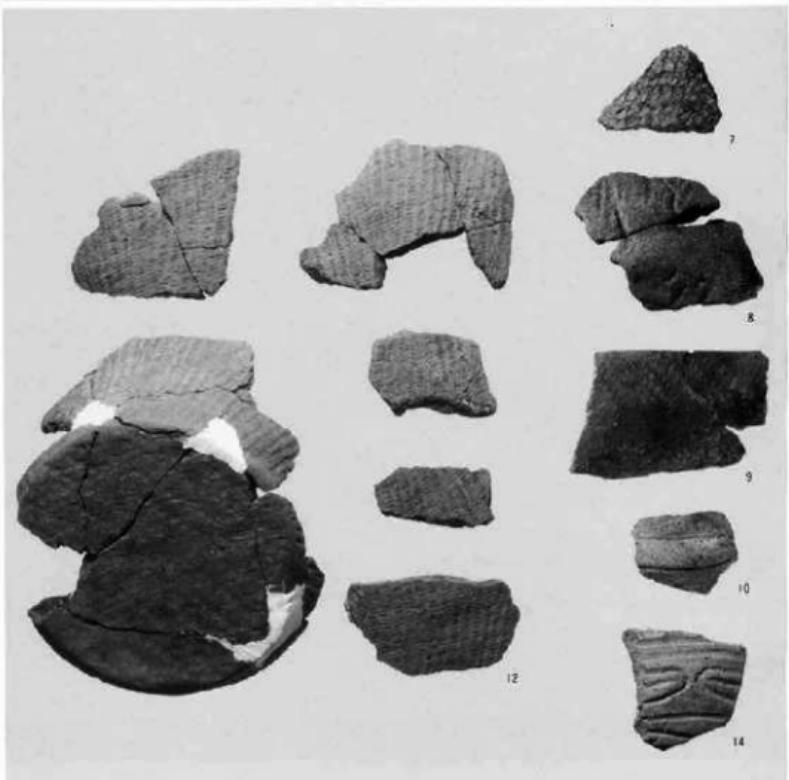
2. 損壊状態
(1・2B区)



3. 損壊状態
(3B・C区)



1. 桐文時代の土器
(遺構外出土)

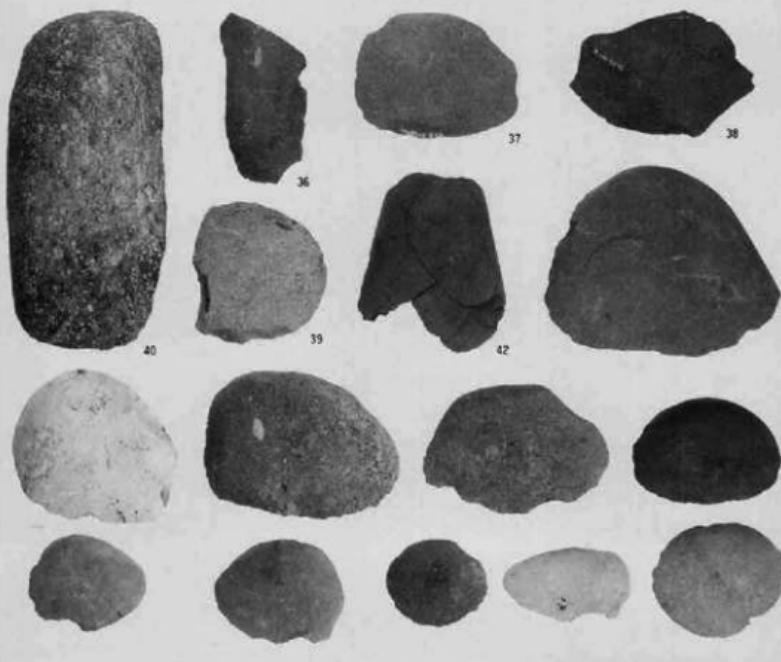


2. 桐文時代の土器
(遺構外出土)

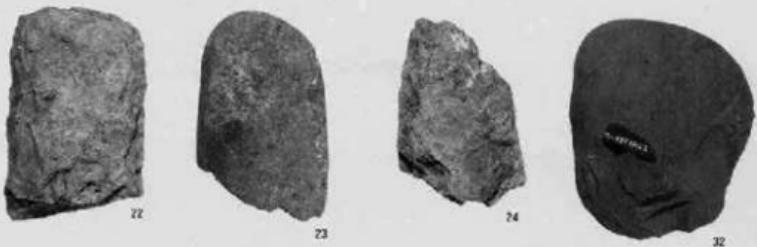
図版29
(鶴口下遺跡)



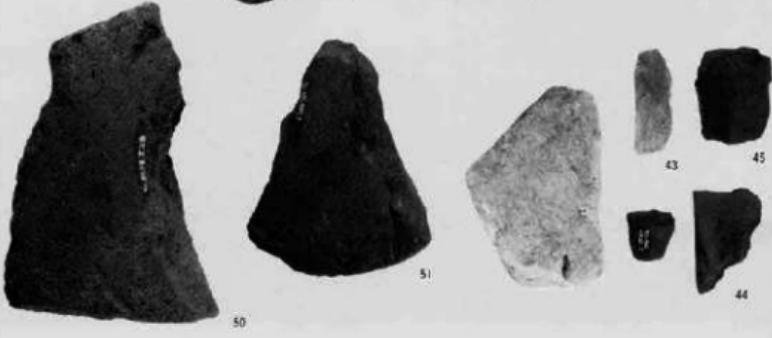
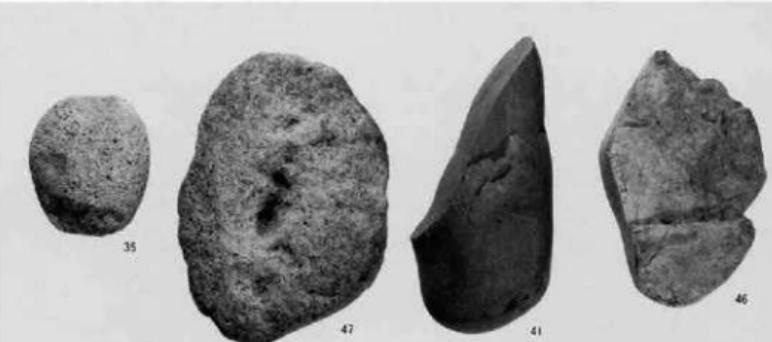
1. 縄文時代の石器
(遺跡外出土)



2. 縄文時代の石器
(遺跡外出土)

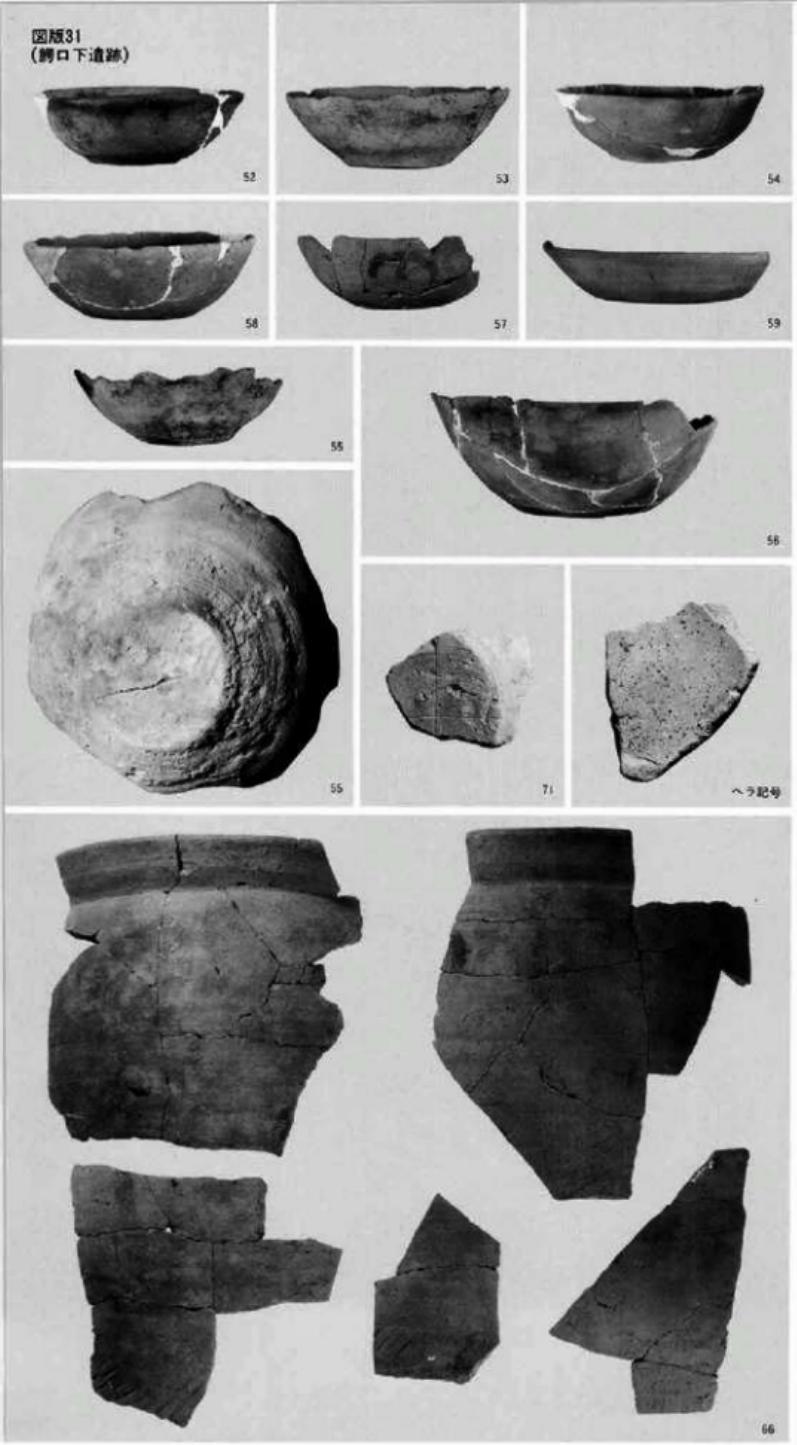


1. 縄文時代の石器
(遺構外出土)



2. 縄文時代の石器
(遺構外出土)

圖版31
(跨口下遺跡)

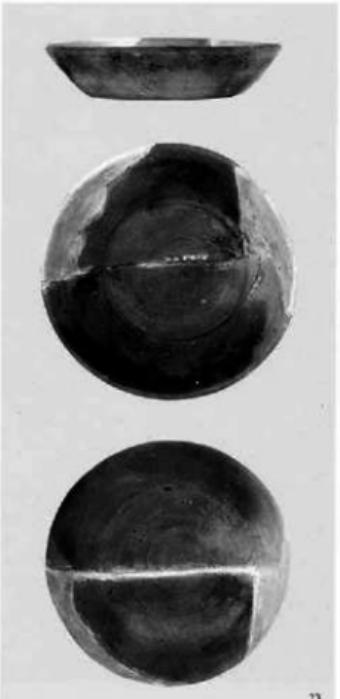


1・2号住居跡
出土土器



1. 2号住居跡
出土土器
(65)

65



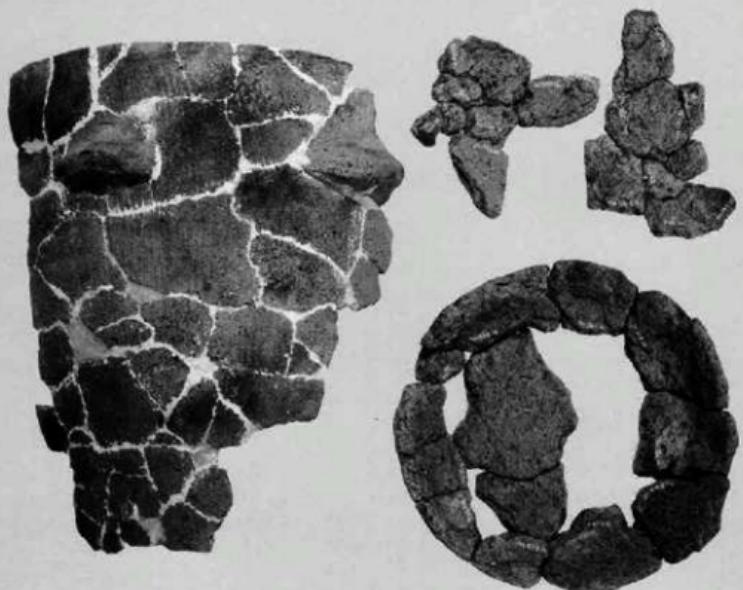
2. 9号溝状遺跡
出土土器
(73)

73



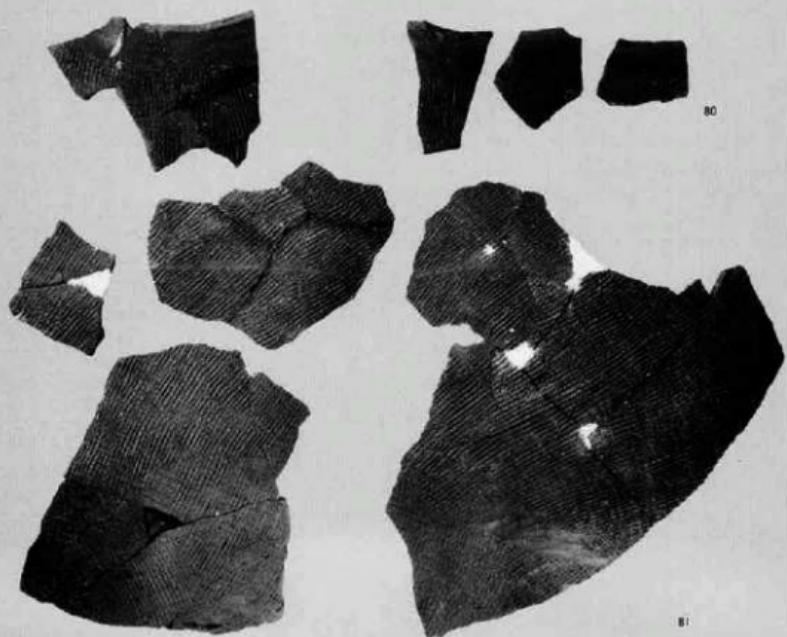
3. 4号土坑出土土器
(79)

79



1. 4号土坑出土土器

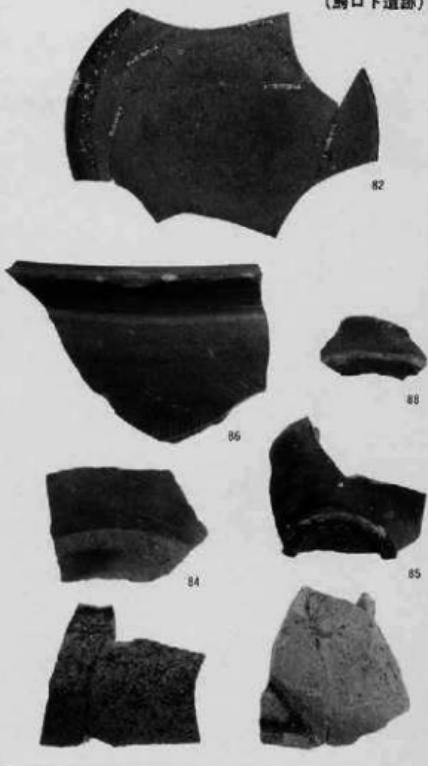
78



2. 4号土坑出土土器

81

80



1. 灰釉陶器 (I)

2. 平安時代の土器
(82, 84-86, 88)



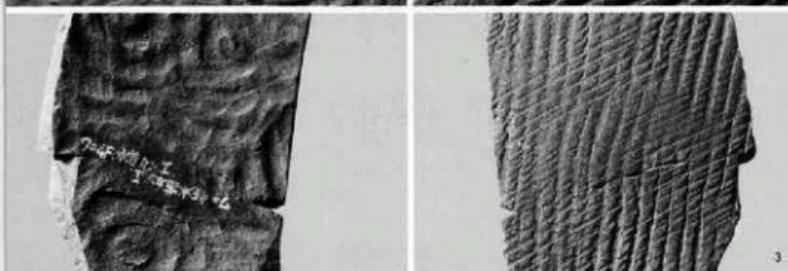
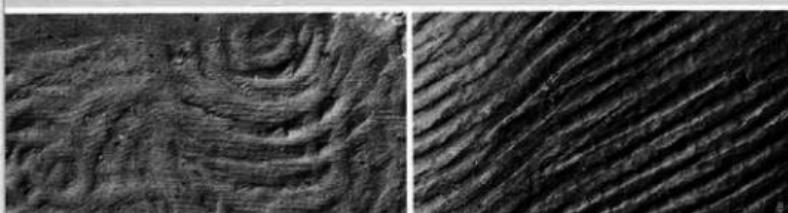
3. 須恵器甕 (87)

図版35
(銚口下遺跡)

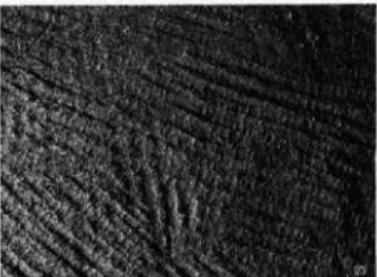
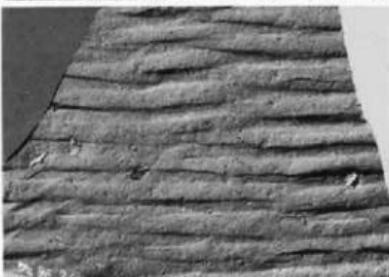
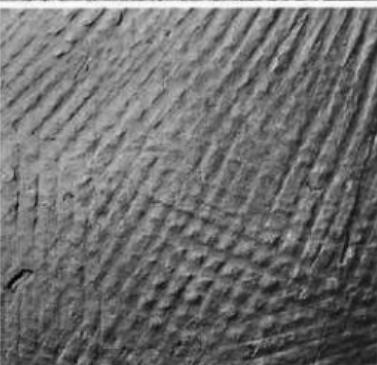
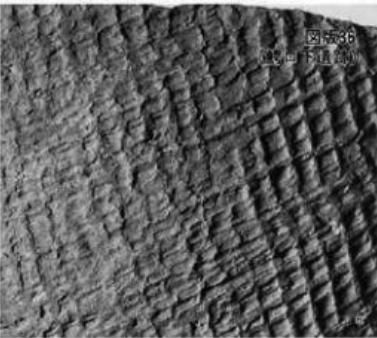
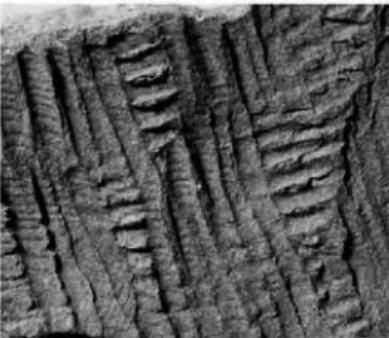


1. 土師器壺
(4D3区出土)

2.

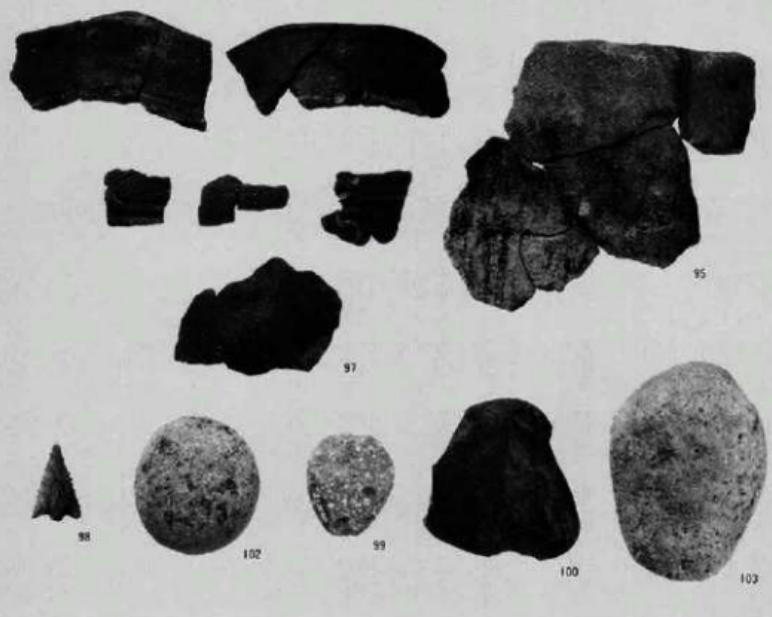


2. 須恵器
タタキ・当て具痕

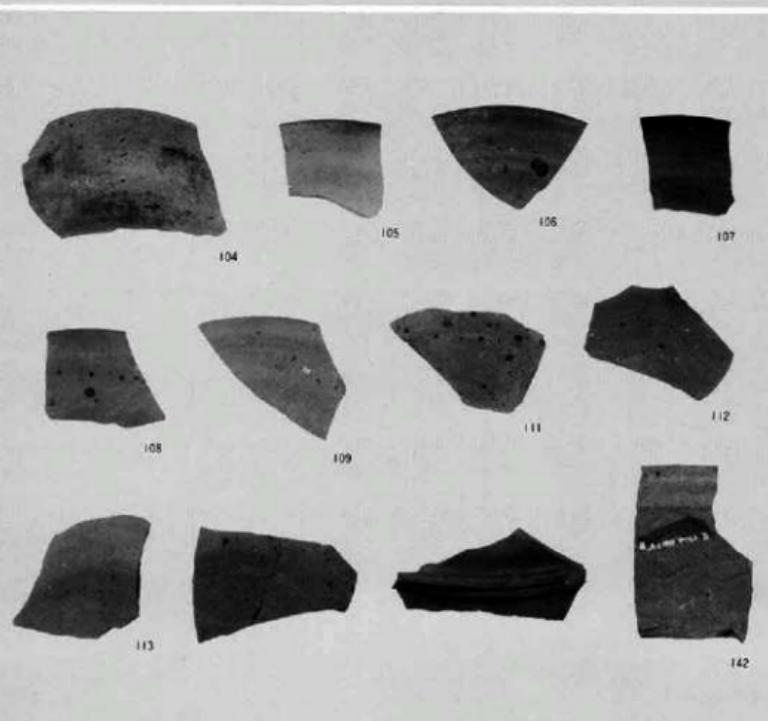


須恵器
タクキ・当て具痕

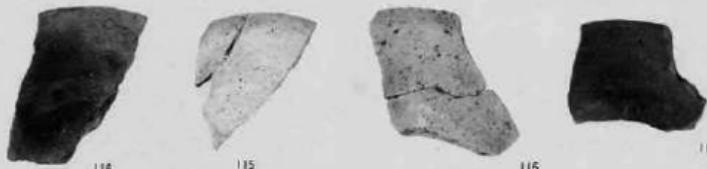
図版37
(美山遺跡)



I. 桶文時代の土器・
石器
(遺構外出土)



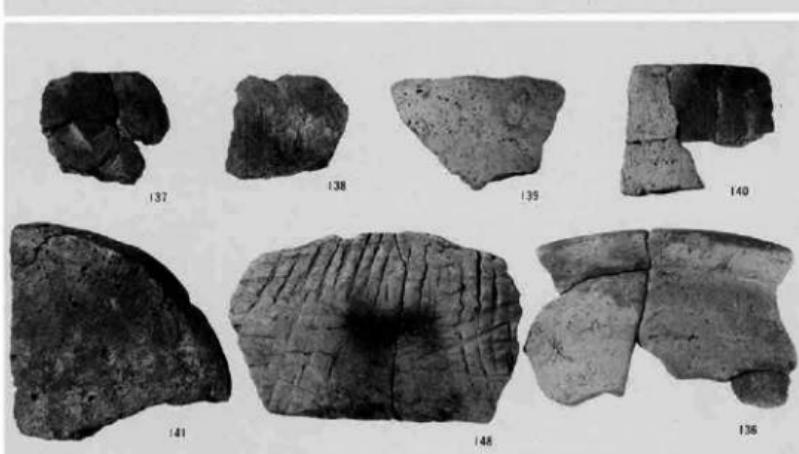
2. 平安時代の須恵器
(遺構外出土)



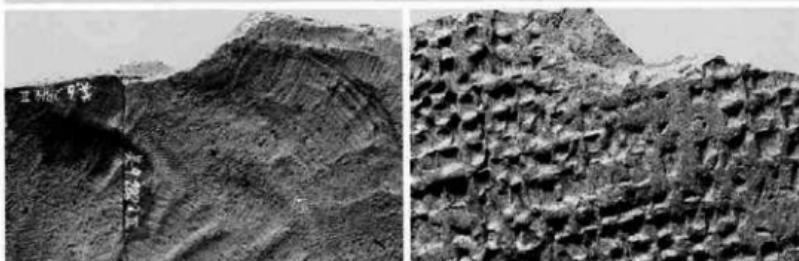
1. 平安時代の土師器
(道横外出土)

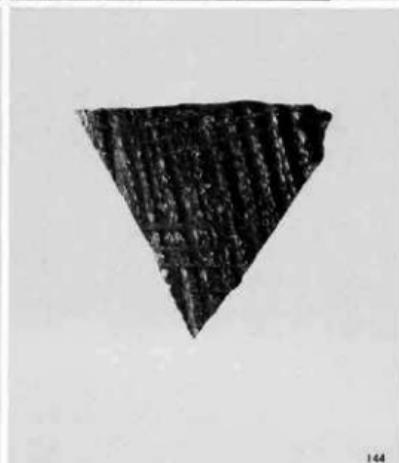
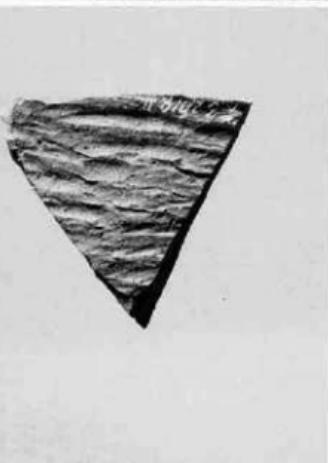


2. 平安時代の土師器
(道横外出土)



3. 平安時代の須恵器
タキ。当て具痕





新潟県埋蔵文化財調査報告書 第54集

北陸自動車道

糸魚川地区発掘調査報告書Ⅷ

わに ぐち した 遺跡
鰐口下遺跡
みやまやま 遺跡
美山遺跡

平成元年3月25日印刷 発行 新潟県教育委員会
平成元年3月31日発行 新潟市新光町4番地1

電話 (025)285-5511

印刷 長谷川印刷

新潟市学校町通1-6

電話 (025)228-3309

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第54集『鶴口下遺跡 美山遺跡』 正誤表

頁	誤	正
図版37 (美山遺跡)	105	109
図版37 (美山遺跡)	106	110
図版37 (美山遺跡)	107	108
図版37 (美山遺跡)	108	107
図版37 (美山遺跡)	109	105
図版37 (美山遺跡)	111	113
図版37 (美山遺跡)	113	111 (右2片も同一個体)
図版38 (美山遺跡)	120の右	No.なし
図版39 (美山遺跡)	143	No.なし